

第2回 散居村の保全と活用シンポジウムの記録

- 1 日 時 平成24年11月25日（日）13：30～16：35
- 2 会 場 砺波市文化会館 多目的ホール（砺波市花園町1番32号）
- 3 テー マ 散居村を生かした経済の活性化
- 4 主 催 散居村の保全と活用シンポジウム実行委員会
- 5 後 援 富山県、砺波市、砺波市地区自治振興会協議会、砺波商工会議所、庄川町商工会、
特定非営利活動法人 砺波土蔵の会
- 6 基調講演 地域資源を生かしたまちづくり ～空き家を活用した地域活性化の取り組み～
講師：麻田 馨 氏（兵庫県篠山市福住まちづくり協議会 前会長）
- 7 パネルディスカッション「散居村を生かした経済の活性化」
《パネリスト》 石崎 元蔵 氏（鷹栖建工(株) 代表取締役）
北村 夏樹 氏（日ビル商事(株) 代表取締役）
森田 由樹子 氏（(株)エコロの森 代表取締役）
横山 宜致 氏（(公財)兵庫丹波の森協会 専門研究員）
《コーディネーター》 余西 孝之 氏（砺波商工会議所 総務委員長）
- 8 主催者関係 《主催者挨拶》 尾田 武雄（実行委員会 代表（特定非営利活動法人砺波土蔵の会理事長））
《閉会挨拶》 杉森 貢（実行委員会 委員（砺波散村地域研究所職員））
《司会》 島田 繁則（実行委員会 委員（砺波市企画調整課職員））
- 9 参加人数 約130人

10 記 録

島田：お待たせいたしました。ただいまから、散居村の保全と活用シンポジウムを始めさせていただきます。私は、本日の司会を務めさせていただきます、砺波市企画調整課の島田と申します。どうぞ、よろしくお願いいたします。

本日のシンポジウムは、9月23日に引き続いての2回目となり、今回から「ふるさとの眺望景観を守り育てる県民協働事業」として富山県の後援をいただき、実施するものであります。

それでは、シンポジウムの開会にあたり、主催者のあいさつを本実行委員会 尾田武雄代表が申し上げます。

尾田：一昨日は、勤労感謝の日でした。昔は、新嘗祭と言いました。神に収穫の感謝をする日でありました。寒さが日ごとに感じられ、もうすぐ初冠雪の季節となりました。本日、散居村の保全と活用シンポジウムを開催したところ、お忙しいところ、たくさんの皆様が参加されまして、本当にありがとうございました。

さて、ご承知のとおり、砺波平野は、世界に誇りえる日本の農村を代表する散居景観を成しております。先人達が長い年月をかけ、守り継いで来られました。しかしながら、農業形態の変化、生活様式の変化、そういったことによりまして、その環境が大きく変貌しています。こうしたことから、この素晴らしい散居景観をもう一度見直しする必要があると思い、3回のシンポジウムを実施することにいたしました。散居村の再発見から活用、そして地域経済の活性化、文化の発

展につながる議論を深めたいと思っております。

第1回目は、「散居村の魅力再発見」をテーマにしまして、基調講演とパネルディスカッションを行ったところであります。基調講演では、職藝学院の上野幸夫先生から、散居村の素晴らしい風景が、世界に誇る価値のあるものだということを言われました。また、伝統的家屋のアズマダチだけではなく、土蔵や地蔵堂、そういった建築物も京都や全国に誇りえる素晴らしいものだとの報告がありました。積極的に市民に気づいて欲しい、そして誇りにして欲しいとのお話でありました。その後のパネルディスカッションでは、散居村における屋敷林や家屋、地域コミュニティなどの地域の魅力を再発見することで、愛着や誇りが高まり、地域の活性化につながるのではないかと意見が出されたところでございます。砺波散村地域研究所などの研究の蓄積、市民大学などの学習の積み重ね、調査研究から、いよいよ実行に移らなければいけない時期に入っています。

こうした議論を踏まえ、今回は、「散居村を生かした経済の活性化」をテーマに、豊かな市民生活を求めて今ある地域資源を生かし、地域活性化に取り組まれています兵庫県篠山市から麻田様の基調講演をいただき、パネルディスカッションでは、様々な立場の方々から散居村の可能性を含めて意見交換を行い、市民の生活、経済の活性化に向けて考えることとしております。御参加くださる皆様方には、この砺波が10年後、20年後どうなるのか、どうあれば良いのかを考える機会となれば幸いかなと思っております。

終わりに、講演を賜ります麻田様、パネリストを務めていただきます皆様方には、心から感謝を申し上げます。シンポジウムの運営にご協力いただきます多くの皆様方、御礼を申し上げ、開会の挨拶にしたいと思っております。

本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

島田：今ほど挨拶にありましたように、前回のシンポジウムの内容につきましては、御手元に記録の要約版を配付いたしておりますので、参考にしていただきたいと思います。内容につきましては、今ほど尾田代表が申し上げましたので、割愛をさせていただきますと思います。

今回は、「散居村を生かした経済の活性化」をテーマとし、前回は議論いただいた散居村の魅力をどのように生かしていくのか、御参加の皆様と共に考えていきたいと思っております。

それでは、まず始めに、基調講演を始めさせていただきます。

◆基調講演◆

島田：本日の講師につきましては、兵庫県篠山市の福住（ふくずみ）地区において、宿場町と農村集落の2つの歴史的景観が、1つの街道に沿って連続するまち並みを後世に残していこうと住民が主体の新しいまちづくりを推進する、福住まちづくり協議会 前会長の麻田馨様をお願いしております。

それでは麻田馨様、よろしくお願いいたします。

《講師登壇》

島田：講師のプロフィールにつきましては、御手元のプログラムにも掲載しておりますが、2008年から3年間、福住地区自治会会長兼小学校校区まちづくり協議会会長を務められ、空き家の活用や伝統的建造物群保存地区の指定に取り組むとともに、まち並みや地域の行事などの地域資源を生かした取組を進めてこられました。

こうした取組によりまして、先月の文化審議会において、重要伝統的建造物群保存地区として、高岡市の金屋町地区等とともに文部科学大臣に答申され、近く決定される予定でございます。

特に、麻田様は、定年退職後に帰郷されており、篠山市を代表する特産物である丹波篠山の黒豆を生産し、自ら農園を経営するとともに、地域への熱い愛着と誇りから、まちづくり活動を積極的に進められ、現在、人口の倍増を目指す「福住プロジェクトX」を展開されております。

本日の演題は、「地域資源を生かしたまちづくり 空き家を活用した地域活性化の取組み」と題し、まち並みと建築を題材としたまちづくり、中でも、新たな交流や店舗、事業所の進出など、その効果などを含めて御講演いただきます。それでは麻田様、よろしくお願いいたします。

麻田：皆さんこんにちは。篠山からやってまいりました、麻田と申します。

昨日は、散居村を案内していただいて、非常に景観の素晴らしさに驚きました。それで今日、お話をさせていただくわけですが、ちょっと私どものところと環境が違うかなというような感じがいたしております。しかし、その中でもお話することが一部でも参考となればと思いますので、一つ貴重な御時間ではありますが、お付き合い願えればと思います。

【2頁】

※【○頁】は、スライドのページ番号です。

それでは、始めさせていただきます。篠山市福住はどこにあるかということなのですが、ここは兵庫県に当たるわけですが、兵庫県は、日本海といわゆる瀬戸内のほうにあります。

【3頁】

ちょうどその中部の東側、いわゆるここが篠山になります。

【4頁】

拡大した篠山がここになりまして、ちょうどこの峠を越えますと南丹市、京都府になります。こちらのほうをずっと行きますと大阪府というところに位置しております。ですから、昔から大阪、京都、特に京街道という名称もありますように、交通の要衝として栄えてきたという所になります。福住は、篠山市にあり、これがちょうど篠山城の跡なのですが、いわゆるこの辺りから福住地区となってきます。京都、それから大阪と隣接しているというところに位置しております。

【5頁】

この図が、篠山市を上空から見た航空写真ですが、福住の場合は、ここからになりまして、ここに峠があります。こちらにも峠があります。ここも峠があるということで、篠山盆地の中でも、もう一つ盆地が出来ているというような所に福住があります。

【6頁】

篠山市の概要は、兵庫県の中東部に位置しておりまして、周囲をこういう 600～800m の山々に囲まれているという、先程申し上げましたように、古くから京都、大阪へ通じるいわゆる交通の要所として発達しております。江戸中期に家康の命令によって、篠山城が築かれております。この辺りが城下町になるわけですが、この辺りは、既に国の伝統的建造物群保存地区に指定されている所です。

市の概要は、先程司会の方から紹介ありましたように、篠山には日本六古窯の1つの丹波焼、いわゆる立杭焼（たちくやき）があります。それと農業では、丹波篠山ブランドとして、黒大豆、山の芋、それから丹波栗、松茸という特産があります。松茸につきましては、松くい虫が入っておりまして、最近ではほとんど取れないというような状況ですが、やっぱり出てきますと、1本が10万円位はするというような非常に価値がある松茸になっております。

【7頁】

人口につきましては、44,314人ということで砺波市より約5千人位少ないかなという規模です。人口と世帯数については、御多分にもれず、人口は平成14年をピークに減ってきております。しかし反面、世帯数は若干増えてきているという、いわゆる核家族化が進んでいるというような状況となっています。

【8頁】

この図が福住地区の最大のか、拡大したところですが、こちらが国道372号線、姫路から京都に通じる国道となっています。この部分が国道173号線で、大阪へ通じるというように、ほとんどこの辺りが交通の要所として、また宿場町として面影を残しているというところになります。

【9頁】

これは上から見ました伝統的建造物群保存地区（伝建地区）の指定地域で、東から西へ3.3kmほどの距離があります。その中心部がこの福住になりまして、この辺りが昔はほとんどが商家ですから、今は非常に空き家になっているというところなんです。

【10頁】

人口の方も、今現在1,533人で914世帯ということで、以前に比べますと約半分近くになって

いる。だから小学校も1年生から6年生までが50人足らずというところなんです。我々のいた頃は、1クラスで50人か60人いまして、大体300人はいたのですけれど、本当に少子化になっているという現状です。

【11 頁】

福住地区は、篠山川がありまして、その支流の靱井川が形成した河岸段丘上に形成された農村集落地域と、それと先程説明したように、東西に京街道、いわゆる山陰京街道が走って、この街道に沿った細長い町になっています。中世、武士たちの往来とともに福住は、京街道と能勢道の交差する交通の要所として栄えて、江戸末期には、本陣、脇本陣が置かれて、藩の御蔵所や役人詰所も立地された。福住は、兼業で旅籠や茶店等を営む農家があった。まあ私の実家も、その頃はちょうど旅籠をやっていたというところなんです。

【12 頁】

鉄道の発達と同時に、旅籠や商店は徐々に廃業となって、その結果、農村集落としての性格を強めて、今の街道に沿った伝統的なまち並みが残る要因ともなっております。現在、福住の街道沿いには、江戸末期から明治初期に建てられた妻入り民家を中心としたまち並みが続いておりまして、江戸期以来の宿場町としての面影が広く残っているというところになっております。

【13 頁】

先程お話ありましたように、国の伝統的建造物群の指定調査が、平成17年から開始されたわけなのですが、その選定準備委員会に最初から関わりまして、指定物件の70%によりやく昨年度に達しましたので、国のほうへ申請し、先程ありましたように、10月19日にお隣の(高岡市)金屋町と同じ時期に文化審議会から答申されて、早ければ12月中に選定を受ける予定ということになっております。

【14 頁】

ただ、この重要物件の指定の同意を得るときに、現在、住んでおられる方については、問題はなかったわけなのですが、一人住まいとか、いわゆる空き家とかいう方の同意を得るのに、非常に苦労した。一人暮らしの方には、息子さんに相談する。または、その方が帰って来られたときに連絡もらって話をして、同意を得られる。ところが、空き家の場合は遠隔に住んでおられますので、帰って来られましたときに何とか捕まえる。また電話で依頼する、文書で依頼する。それで非常に荒果てておりますから、「つぶしたいんや。管理もかなわん。」ということで、なかなか同意も大変だった。しかし、その同意を取るときに、「それじゃあどうするの？つぶすの？人に貸すの？」。また、貸すのにしても補修費が高くつくので貸せない。しかし、とにかく同意して頂戴よ。ということで、何とか70%以上集まったということになります。それで、先程の伝建地区については、8集落ありまして、自治会長が奔走した結果、指定が受けられるような形になってきたというところになります。

【15, 16 頁】

ちょっとしたまち並みを見ていただいたらと思うのですが、これが旧農村地区になります。

【17 頁】

これが福住の中心部のまち並み。これは、いわゆる裏側から見たところになっています。

【18 頁】

これは、山の方から見渡したところなのですが、この街道筋が伝建地区になるわけです。

【19, 20, 21, 22 頁】

これが、町の中心部に近いところのいわゆる農村部というところになります。こちらの方に住吉神社があるわけなのですが、この住吉神社から東側、いわゆる京都寄りのほう、これが農村集落になります。こちらのほうが、住吉神社の西側がいわゆる商家群というところになります。こういう形でずうっと並んでいまして、いわゆる妻入りの形がほとんどこういう形で並んでいて、こちらが縦になっていれば、こちらが横になっているという、うまくこのように交互に家が建っているというようなものが特徴だと思います。

【23, 24 頁】

これが宿場町の中心です。こちらの方はまた後から出てきますけれども、県民交流広場として使っている古民家ということになります。こちらの方が、先程申し上げました脇本陣の跡地に、

市が市営住宅を建ててくれています。約 20 戸で小学校へ 10 人入れば、半数以上はこの団地の子どもです。ということで、小学校の複式学級を防ぐという一つの大きな要因となっています。色々な視察に來られて見られるのですが、一般の市営住宅と違って建て方がユニークなので、びっくりされる方が多々あります。

【25 頁】

こちらが先程言いましたように、「さんば屋ひぐち」ということで、空き家の改修の第 1 号になります。これは、平成 21 年にオープンしました。これは県の助成金を金額は 1,300 万円の助成をいただいて改造して、県民交流広場の拠点として、まちづくり協議会が使っているということです。それと中にしましても、こういうふうに見ていただければ分かりますように、今住んでおられた時は、上に天井を張って上の骨組みは見えなかったのですが、それを全部取っ払いまして昔の骨組みと天井裏まで見えるようにした。板の白いところは、柿渋を塗ったりして、昔風にやっていました。それについても、こういう形で、ボランティアで、先程紹介がありましたプロジェクト 2030 の若者たちが中心にボランティアでやっていったということになります。

【26 頁】

それと地域に祭りとか、いわゆる文化的なものがあるわけですが、こういう住吉神社の「水無月祭り」というのが 7 月にあるわけなのですが、こういう「打ち込み囃子」というのがあるわけなのです。これも年配の方からずうっと見様見真似で教えてきてもらってきたのですが、それがもう、教える人も学ぶ人も非常に少なくなってきた、もう 10 年位途絶えていたわけなのです。ところが、見様見真似で三味線とか、それから胡弓、鼓、笛、太鼓というような楽器を使ってやるわけですが、それが途絶えていたものが、ある先生にパタッと会って、三味線なり太鼓とかの色々な楽器の楽譜化が出来まして、4 年前からこういう形で年配者からほとんど若い人、女性も入って復活してきた。ということで、打ち込みをやっているのが 5 つあるわけですが、そのうち 4 つまでが同じ方法で復活してきたということです。

【27 頁】

これが熊野神社で、同じようにあるわけですが、こういう形で造りものをやっている。例えば、ある集落ではこういうふうには羽物ばかりでつくるとか、色々な竹だけで作るとか、一つの材料でこういう造り物を作っているということです。この祭りにつきましても、ただ見てもらうわけではなくて、各集落、先程の水無月祭りと同じですが、やはり光街道を作ったり、光街道を作って、いわゆる海苔の空き瓶等とかに小学生に絵を描いてもらって、それを張って包んだりとか、色々な工夫をしてやっているというところとなります。

【28 頁】

地域づくりのコンセプトとして、農業や自然環境を生かした地域間の交流の促進。それと先程言いました歴史的なまち並みや文化の形成、いわゆる地域の資源としての活用。それと先程の祭りや地域活動を通じたコミュニティの活性化をコンセプトとしてやっているということになります。

【29, 30 頁】

それと同時に言えるのは、まちづくり協議会を中心に、それと先程お話ししました県民交流広場拠点のさんば屋を使って、1 day shop とか、里山を食べる、それからお菓子作りとか味噌作りをやっています。また、先程の「プロジェクト 2030」の組織化ということで、単独で行動していたのですが、3 年前からまちづくり協議会と一緒にやろうということで、まちづくり協議会の一つの部会として一緒にやっております。このプロジェクト 2030 という命名なのですが、2030 年に今の福住の人口を倍にしようというような意気込みで、プロジェクト 2030 というように命名しております。このプロジェクト 2030 のメンバーは、福住地区の若者、中堅だけでなく、福住地区外、いわゆる県外の人も参加できるというように非常にバラエティに富んだ、そして年齢もバラエティに富んだ一つの組織ということになっております。ですから、こういう「田んぼアート」とかをもうやっているわけですが、これは田んぼアートと言って、篠山市のマスコットの「まるいの」をした時のものです。

また福住には、東雲（しのめ）高等学校というのがありまして、分校の時から非常に特徴のある学校でしたので、昨年からは独立校としてオープンしたということになります。この東雲高校

との連携というのは、防災訓練、それから福住祭等を一緒に共同で、高校生とまちづくり協議会が一体となって色々なイベントをやっているということです。それから、神戸大学との連携。それと「ユース六篠」との活動協力ということなのですが、なぜ神戸大学と言いますと、神戸大学と合併した、篠山農業大学というのが篠山にありまして、その農業大学が神戸大学と合併しました。その関係もあって、神戸大学の方も篠山にそういうセンターを設けて、地元の者と協力してやっていこうということで色々な事業に神戸大学の学生、また教授の方も来られて、色々な事業に取り組んでいるというところです。

【31, 32 頁】

それで、歴史的なまち並みの地域資源としての活用ということで、これは「町並み散策会」とか色々なことをやっています。「おばあちゃんの風呂敷展」、それからさんば屋ひぐちでやります「ひな祭り事業」とか色々な行事をやっています。こういう形で色んなものに出てくるのが、神戸大学の学生というところもあります。

これが先程言いましたように生活文化でひな祭り、これはさんば屋ひぐちで、昔持っておられる雛人形を1か所に集めて、篠山市と一緒に各地区でこういうひな祭り事業をやっているということです。これが年末になれば、草履を作ったり、しめ縄を作ったり、こういうふうなワークショップもやっている。これも恒例のもちつきもやる。交流広場拠点のさんば屋のところでやっています。

【33 頁】

こういう形で色々と協力的に色々なグループでやってきますと、こういうグループが生まれてきました。福住の郷土料理研究グループということで、当初は、まちづくり協議会の組織の中の婦人部隊として、色々なイベントをした時に模擬店とか色々やっていたのですが、それでは飽き足らなくなって、こういう郷土料理研究グループを作りました。これは当初、資金的にも無いので、自治会長会が多少ですけども、2年間ほど資金的援助をして、ようやく今年度ぐらいから独り立ちできるようになったかなということで、旧農協跡の福住支店を改修して、キッチンオープンさせました。9月に。そしてそのうち、弁当を作るようになって、今一人暮らしとか、色々な人のニーズのある人の弁当を毎日作って、宅配をやっておるというところになります。

【34 頁】

それと新たな取組として色んなものですね、これはバルーンですね。これは、先程ありました田んぼアートを上から眺めるということ、こういうバルーンを借りてきて、子どもたちを乗せて、上から田んぼアートを見てもらうというような取組をしております。

【35 頁】

それと、これにつきましては、これ「雪花火」の光景なのですけども、先程言いましたプロジェクト 2030 の発想で、花火は夏のものだけじゃないという話が出まして、それじゃあ、冬に上げようということで「雪花火」と命名して、本当にこの日は雪が降り出したというようなところなんです。やっぱり、夜になると、このようにロウソクを立てて、色んなアートというか模様を作って、そこでこういったものをおいて、これは夜ですよ。花火を上げていく。澄んだ日になれば本当に素晴らしい花火です。予算の関係でそうたくさんは上げられませんが、結構皆さん喜ばれて、恒例になってしまったということで、毎年、雪花火をやっております。

【36 頁】

それと福住でやっていることは、こういう形で「さとねっと」という広報誌、これを月1回発行しまして、各家庭に配っている。それと、ちょっと見にくいのですが、ここに毎月の世帯数と人口、今、現在こうですよ。プラス何人、マイナス何人という形で書いて発行しています。それと、色々な行事を知らせたり、また色々な人を募集したり、それから入ってきた人を紹介したりする場合にも特集を組んで紹介していくということで、住民には非常にさとねっとが定着してきたというところです。

【37 頁】

それからいよいよ、これから空き家活動に入ってくるわけなのですが、福住で空き家が非常に多いということで、何とかせねばなんということになります。それで、こういうワークショップを定期的に開催しました。これは、先程のさとねっと、またホームページ等で募集しまし

て、非常に広範囲から人がたくさん寄ってきていただいたということで定期的に開催をしております。

【38 頁】

次にこれが、福住地区の伝統的建築物群の保存地区ですが、この1年間に進出してきたお家というか企業です。主なところが、先程申しましたさんば屋ひぐちです。これは拠点として、平成21年に完成しました。このイタリアン料理店、これが今年の5月にオープン。それと、このゲストハウス。これも民宿のような形であってですけども8月にオープン。それと、こちらのほうにガラス工房。これも4月に決まりまして、4月にオープンしているということになります。ちょっとその後ですけども、こちらのほうにエムズシステムという企業が配送センターを作りました。行く先々は福住のほうで古民家を活用して、工房やギャラリーを作りたいというような手配になっております。それと同時に、このギター工房。これもイタリア料理店の横で決まりまして、今月から工事に入ったということです。その前にここになのですけれども、ここにギャラリーをやりたいという方がおられて、家主に色々な提案をしております。今、家主の返事待ちということになっています。それとこの定住体験施設というのは、今、取り組んでいまして、1月にオープンの予定ということになります。この定住体験施設につきましては、県と市の助成を受けまして、本当に田舎に暮らしたい。しかし、住んだこともないので分からんという方がいらっしゃいます。ですから、そういう方に1か月なり2か月なり、この体験施設の中に2組住めるようにしますので、とりあえず1か月でも2か月でも住んで頂戴よ。気に入れば、福住に住むということになれば、物件探しもお手伝いしましょう。だめであれば、やむを得ないのですけれども。ところが今、幸いにも完成待ちにしておられて、先だっても来られまして、子どもさんも連れて来られて、1回見せて頂戴よということで見てもらったのです。それと、ついでに小学校も見ていくと。今、ほかのところにもちょっと仮住まいをさせていただいていまして、オープンすればこの体験住宅施設のほうに住んでいただくというようなところで、本当にこの1年間でめまぐるしく進出してきたり、話が進んだり、本当に人は人を呼ぶという感じかなと思っております。

【39 頁】

これが今年オープンしたイタリア料理店の元のところ、原型風景です。こういう形でオープンしますと、非常にきれいになっていくわけなのですが、ただ非常に家が傷んでいます。だから即住めない。それと家主の方も、色々片付けるのに非常に困るということなのです。この家の場合、たまたま家主と話しまして、それじゃあ、兵庫県と篠山市の方から少し援助してもらいましょうよということで、家主に10年間、この建物を市のほうへ無償提供していただきました。それによって、県と市の全額じゃありませんが、一部、営業部分のところだけでも助成をしていただきました。だから、本当に空き家によってパターンが変わってくる。10年間、市へ無償提供しますと市のほうとか県のほうも、個人の家にお金をつぎ込むのではなくて、市が無償提供してもらった自分の家に金をつぎ込んだということで、住民の批判がなくなるということで、こういう形で10年間、市へ無償提供していただいた。その10年後については、売却か、また引き続き賃貸するかはお話しようというような形のケースです。

冒頭に申し上げましたように、本当に片付けるのが大変だと。工事費も結構かかるということで、ボランティアを募集しました。そうすると、手弁当で来ていただいて、本当に片付けから工事の一部から手伝ってもらって、多少でも安くなるのでないかなというところなんです。これが2012年、今年の冬ですね。ボランティアした分をちょっとフィルムで収めていますので、ちょっとこのボランティアの活動状況を見て頂ければと思います。

★「古民家改修ワークショップ」の映像 <http://youtu.be/UKQmoqarsb0> ★

(映像を見ながら) 篠山もよく雪が降るんですよ。

(改修作業の内容を説明する状況) 今、設計士の方が、色々な資料を説明しているところです。

(工事作業風景を遠くから眺める人々) これは、近所の人達が物珍しそうに、何やっているのかよく見に来るんですよ。

麻田：こういう形でまちづくり協議会、地元の人等が挙げて支援しているというところなんです。

それで空き家活用には、色々なパターンがあります。先程申し上げましたようにイタリア料理店の場合は、市のほうへ10年間、無償提供しています。映像はちょっと無いのですが、ギター工房につきましては、いわゆる賃貸で補修費は入居者が全額負担する。その代わりに家賃ですよね、家賃がその補修費に満つまでは家賃は要りませんよ。しかし、固定資産だけはみてくださいというパターンもあります。それと次に出てくる映像で、ゲストハウスが出てくるわけですが、この場合については、物件を買い取って自分で直すというところになります。ですから資金的な負担は、相当大きかったかと思います。結構、痛んでおりましたので。ですから、市のほうに10年間であれば10年間無償提供。それから、家賃が補修費に至るまでに要りませんよという場合。また逆に、先程申し上げたように、家賃が補修費になるまでは無料ですよというように、色々なパターンがあるのです。

【40, 41 頁】

これが、「ゲストハウスやなぎ」のオープンしたときの写真となります。これがJA農協の跡地を買った所にある倉庫なのですが、倉庫の中がスレートじゃなくて、このように木組みの倉庫になっていまして、これを非常に気に入ったということで、ガラス工房が進出してきたということになります。

【42, 43 頁】

それで、丹波地域の空き家率は、平成10年に比べて平成20年に、他の地域よりも倍以上の空き家が増え非常に厳しい状況です。この空き家の件数と種類ですけれども、篠山市で609軒の空き家があります。そのうち、活用可能なものは389件。それで実際、活用したものが6件。というようになっていますけれども、既に私どもの福住地区だけでも6件ほど活用しておりますので、ほとんど福住かなということになっています。

【44, 45 頁】

現状、空き家が増えて維持管理がされず、地域が荒廃。これは本当に空き家が増えてくると、もうほったらかし。私どもの所では、アライグマが巣を作ったり、ヌートリアが来たり、ハクビシンという動物もおりまして、非常に農作物、畑作物を荒らすということで困っていたのですが、こういう形でずっとやっていくとそういった巣が無くなってきて、畑作物も荒らされずに済むということで、管理にそれから近所の人にも非常に良いということになります。

【46 頁】

空き家活用の利点としては、地域に一つがオープンすると魅力が高まってくる、景観も良くなっていくということになります。入った方も、色々な地元の人とうまく溶け込んでいただくとか絆が強まってくる。交流人口も増えてきて、今のところはまだ少ないですが、働く場の可能性も出てくるということになります。

【47 頁】

空き家の種類でも、二次的住宅と言いまして、保養、避暑等に利用しているもの。その他の二次住宅、これは寝泊り用で、お盆とか正月とか色々な法要や用事のある時には帰って来て泊っていく。平常はいつも空いていますというところの家なのです。3番の空き家、それから4番の空き家は、これはもうすぐに賃貸なり売却用にしますから、すぐに不動産と市場に出されて、我々の入って行く余地はない。古民家の再生というところは無いということになります。今やっていますのは、この空き家であり、すぐに住めない。しかし、持ちたいなという意思のあるところです。これについては、地域で運営なり活用していく。この5番のところを我々まちづくり協議会の方で取り組んでいるということになります。

【48, 49 頁】

篠山市の施策として定住促進の取組は、篠山市暮らし案内所の開設運営、それから空き家バンク、それから古民家再生モデル事業というメニューを行っています。それと活用事業として、空き家活用謝礼金事業。いわゆる空き家バンクに登録して、誓約すれば10万円とか、空き家活用事業補助事業として、先程申し上げましたように、国と県の補助事業。県の場合は3/4、県と国の場合は1/3とか2/3とか色々な制限がありますけれども、こういう制度を利用しまして、先程お話ししたイタリア料理店にも、こういう公的な資金をつぎ込んでいるということになります。

【50 頁】

それで我々のところは、地域の役割として、今、私たちが取り組んでいることなのです。この人脈を作り、地域の空き家の情報を目一杯収集ということなのですが、これにつきましては、自治会長なりまちづくり協議会長は、色々な会合があったり、ほかの所への視察があったりしますので、できる限り参加をして人脈を広げていく。そして色々な情報を収集する。これがやはり、自治会長なりまちづくり協議会長ができる一つの情報の収集方法かなと思っております。

それと、情報収集なのですが、私も何かないかなと考えますと寺の住職から聞くことです。私の法事の時に、寺へ行って何か空き家はないかと聞くと、「どこと、どこと、どこにあるで」というように即座に返って来るのです。何故かという、盆前とか色々な法要とかに、住職はお経をあげに行きます。そうすると、その家族と親密になって、この後、家をどうするのとか、色々な話をしているわけです。だから、私が面識ない場合は、「そこへちょっと電話してくれや」。そうすると住職は、「こういうことをやっているから、誰それから電話あるから頼みますよ」と言って連絡してくれるのです。その後電話すると、相手の方も私という人物を知ってもらえる。だから、スムーズに話が進んでいくということもあります。それと同時に、先程も申した伝統的建造物群保存地区の同意書をもらうときに、そういう方に今後どうするのと聞いた情報も生きてくるわけなのです。先程の住職の話に戻りますけれども、やっぱり帰ってきて、持ち主が何の抵抗があるかと言いますと、やはり仏壇がそのままある。だから、一番進みにくいという面もあるのです。そうすると、やはり帰ってくるのも大変だったら、お寺で預かりましょうかとか、そちらに持って行かれますかとか、空き家の所で仏壇を置く場所だけ作りましょうかとか、色々な提案ができて、そのどれかに合えば、どんどん話が進んでいくということになります。だから本当にこの辺りはどうか分かりませんが、同じように住職が、空き家の方がおられれば、帰ってこられる場合は別ですけど、遠隔地におられる場合は、色々な法要とか盆前とかの際にお経をあげに行かれると思うのです。だから、そういう方の情報を一つ活用されるのもいいのではないかと思います。

【51, 52 頁】

先程申しましたように、色々な相手が来ると、いわゆる地域雇用、イタリア料理店でも1人や2人はちょっと採用したいとか、配送センターを作ればいずれはこういう若者を採用したいな、とかいう形も出てきます。それと予想以上の集客効果として、県や市のお金を使いますと、色々な雑誌等にイタリア料理店オープンとか、商工や観光課などが、ガラス工房オープンとか色々なPRをしてくれています。それと同時に、そういうお店がHPを作ってやりますので、本当に色々な階層、街から人がたくさん集まってくる。駐車場を見ていると、福住は大阪とか京都に近いので、大阪ナンバー、京都ナンバーの車も結構止まっているということで、非常に活気が出てきつつあると思っています。それとイタリア料理であれば、ガラスの食器類を使いますから、ガラス工房を紹介したり、色々なコーディネート等もやりながら、地域の活性化を図っていったところになります。

住民につきましても、先程述べましたように、これだけオープンしていきますと、「この家、何とか使い物にならん？」とか、「私の家、何とかならん？」などの話が舞い込んできます。そうすると、じゃあ心がけてやりましょうかということで、ギター工房しかり、今回、変わった茅葺の家も入れる話も進みつつあるということで、本当に、こういう言い方が良いか分かりませんが、「類は類を呼ぶ」ということで、伝建地区の指定を受けるというものもあるのかもしれませんが、そういう形で非常に前向きに住民のほうもなってきた、興味を持ってきている。だからこの流れを何とか断ち切れないようにやっていければと思っています。

【53 頁】

こういう形で、先程も申し上げたワークショップも定期的にやって、地元の人だけでなく、色々な遠方からの地区と関係のない方からの意見も聞きながらやっていく。この分については、空き家の活用委員会。まちづくり協議会の中に、このような委員会を作りまして、定期的にどうやっていこうかというようなこともやっているところです。

本当に、参考になるかどうか分かりませんが、私どものほうで取り組んでいるものを紹介させていただきました。こういう丹波特産の特産物もありますので、また何かの機会があれば、

篠山のほうまでお越しいただければ幸いです。

本当に、どうもありがとうございました。

島田：麻田様、どうもありがとうございました。麻田様には、地域づくりは地域間交流の推進、または地域資源の活用、そしてコミュニティの活性化が大事である。また、多くの空き家の再生の事例を紹介いただきまして、これからの砺波市において、景観を形成する古民家の活用について、大変参考になるお話であったかと思います。また、地域住民による自主的な活動が、地域の活性化を作り上げているということで、非常にこれもうらやましく聞かせていただきました。また、空き家の情報はお寺に聞けというのも非常に参考となったところでございます。本当にどうも、ありがとうございました。

折角の機会でございますので、会場の皆様から御質問をお受けしたいと思います。御質問される方は、挙手のうえ、御名前を述べていただき、御発言をお願いいたします。

聴講：私、この砺波市のこちらに家を持っておりますけれど、現在は埼玉県に住んでおります。先程のお話をお伺いしまして、私の家は空き家ではありませんが、毎月20日ぐらい空けて、毎月こちらに帰って来ております。空き家の利用につきまして大変御苦労されまして、立派なまち並みを今、形成されておられるのを拝見して、大変うらやましく思いました。もう一つ注文と言いますか、写真を拝見してまして、同意を取られるのが大変だったと思いますが、その上にもう一つ、私が先程の画面を拝見してまして、せっかくのまち並みが電線、電柱が非常に邪魔をしているのではないかと。これの予算を何とかつけていただきまして、更にまち並みをきれいにしていいただければ、全く非の打ち所のない歴史的な建物の保存が達成されるのではないかと思います。大変差し出がましいと思いましたが、感想を述べさせていただきました。どうぞお願いします。

麻田：ありがとうございます。先程お話がありましたように、本当に電柱がね、非常に目障りだということで、やはり篠山市なり、関西電力の方に何とかならんかねという話をしておりますけれども、ちょっと伝建の指定になるのが遅かったかなと思います。7、8年前にちょうど下水道が出来まして、その時であれば下水道管を掘るときに共同でできたかなと思うのですけれども、今のところ、市なり関西電力なりそちらの事業が無いもので、なかなか難しいかなと思うのです。おっしゃるように、電信柱が無ければ本当にすっきりした町になっていきますので、今後、機会がある毎に、市の方なり関西電力の方なりに要望していきたいと思っております。

島田：他にどなたかございますでしょうか。

聴講：素晴らしい事例ありがとうございます。何度か画面とかに出てきた、ノオト（NOTE）という組織について、ちょっとどんな組織か伺いたいなと思ったんですけども。

麻田：ノオトは、篠山市が全額出資した第3セクターの企業であります。篠山市が色々な空き家事業をノオトのほうへ委託している。ですから、色々な情報はノオトのほうへ集約されて、それから私の方へ来るということなのです。だから情報は、色々ノオトのほうを通じてくるものもありますし、これだけ空き家の活用が進んできると、住みたい人も実際、自分で見に来られる場合もあるわけなのです。その場合は、近所の人に聞かれて、「まあ、空き家のことやったら、麻田のところまで行けや」ということで、非常に私を尋ねてこられる場合が多いのです。そういうことで、家主とセッティングする。でも、だれかれを会わせるのではなくて、私が会った時に、色々な村の行事とか、色々な風習等をお話して、「良いですよと、同じにさせていただきますよ」という方のみといたら誤解や怒られるかも分かりませんけれども、家主さんに紹介する。何かもう一つだなと思う場合は、「すみません、ちょっと申し訳ない。今、手持ちもありませんし、この物件も他の話が先に進みますんで」ということでうまくお断りして、ある程度はこういう言い方は何ですけれども、やはり地元に溶け込んでいくことが第一ですので、そういうことを優先的に考えて、家主さんとの仲介役をやっているところです。

島田：時間の都合もございますので、以上で質問を終了させていただきます。

それでは、御講演をいただきました、麻田馨様に今一度、盛大な拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

麻田：どうも、ありがとうございました。

島田：次のパネルディスカッションに入ります前に、準備等のため、休憩とさせていただきます。パネルディスカッションは、2時45分から始めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

◇ 休 憩 ◇

◆ パネルディスカッション ◆

島田：それでは、ただいまから、パネルディスカッションを始めさせていただきます。

先程の基調講演におきまして、篠山市福住地区における地域の課題を克服する事例を紹介されたところでありますが、私たちの砺波においても様々な課題があるところであります。

今回はその中でも、散居村を生かすための課題などに焦点を当て、意見交換を進めることとしております。

それでは、本日のパネリストを遠路、お越しいただいた方々から順に紹介させていただきます。

はじめに、ステージ右から2人目、横山宜致様でございます。

横山様は、民間のまちづくりコンサルタントに勤務される中、都市計画及び地方計画に関する技術士を取得され、1999年からは、兵庫丹波の森協会の専門研究員として、丹波地域で住民主体の地域活動やまちづくり活動のアドバイザーを務めていらっしゃいます。

また、篠山市景観形成専門員として御活躍されているほか、まちづくりに関する各種役職に就いておられ、地域の活性化に貢献されておいでます。

次に、左隣になります、森田由樹子様でございます。

森田様は、以前、新聞社に勤務し、子どもの出産により夜勤のない職場を希望されて、仕事を通して全国の地域おこしの現場やツアー作りの現場に関わっていらっしゃいました。

その後、御主人が出身地の富山に転勤となったことに伴い、自ら早期退職し、御家族三世代が揃って移住され、現在は、県内の地域資源を生かしたエコツアーの企画・販売などを行う株式会社エコロの森を起業するとともに、富山県景観審議会委員などを務められております。

次に、更に左隣になりますが、石崎元蔵様でございます。

石崎様は、鷹栖建工株式会社代表取締役のほか、富山県宅地建物取引業協会砺波支部長などの役職に就いておられます。特に、国産材の使用を中心とした木の住まいにこだわった家づくりを基本とし、人と自然にやさしいまちづくりを目指した取組をしていらっしゃいます。

次に、右端になりますが、北村夏樹様でございます。

北村様は、日ビル商事株式会社代表取締役を務められておられる中、以前に勤務されていた森ビル株式会社での経験を生かし、つなぎ役として各種プロデュースを手がけられているほか、地域ブランディングを目的とする「こここプロジェクト」のプロジェクトリーダーを務められていらっしゃいます。

最後に左端、コーディネーターを務めていただきます余西孝之様でございます。

余西様は、砺波商工会議所の総務委員長のほか、株式会社余西商会代表取締役、となみ観光交通株式会社代表取締役社長を務めていらっしゃいます。

また、このたびのシンポジウム実行委員会の委員を務めております。

それでは、この後の進行は、コーディネーターを務めていただきます余西様、よろしくお願いいたします。

余西：それでは、このたびのコーディネーター役を仰せつかっております余西でございますが、始め

させていただく前に、前回のシンポジウムにおいて、「この素晴らしい散居村が世界に誇るものであり、これを生かして地域の発展ができないか。また、人々とのコミュニケーションのほか、自然環境とのコミュニケーションなど、心の豊かさを深める必要がある。」ということで集約が前回されました。

そこで、地域の発展に関しては、人々が働き、生産することによって築かれるものであることから、これからの方向性について議論を進めるところでございます。

先にお話いただきました兵庫県篠山市の福住まちづくり協議会前会長である麻田馨様に「地域資源を生かしたまちづくり 空き家を活用した地域活性化の取組み」と題し、地域の活性化に向けた事例を紹介していただいたところでございます。地域住民の主体的な活動がポイントとなることなど、これからの取組に大いに参考となるお話をいただいたところであります。

この後のパネルディスカッションでは、様々な分野から御意見をいただき、議論を深め、その可能性を模索していきたいと思っております。そこで、今回は時間がオーバーしまして、今回は皆様方に4分ということになっておりますが3分ということで、講師の予定もございまして、3分の時間の中でまとめていただいて、お話いただければと思っております。

それでは、先程からの基調講演を踏まえ、このパネルディスカッションでは、それぞれの立場から様々な取組や印象など、散居村を生かした経済の活性化について考えていきたいと思います。

特に、篠山市と砺波市とでは、地勢や住環境、経済環境など、異なる点が多々あると思いますが、地域が抱える課題としては、合い通じる点もあると思います。

そこで、石崎様には、まずトップバッターとしてお願いしたいと思っております。特に、建築という観点から住宅事情について、砺波地方のお話いただければと思います。どうかよろしくお願いいたします。

石崎：今ほど紹介いただきました石崎でございます。

不慣れなことと、時間が区切られていますが、全体で3回喋るのですけれど、3×3の9分以内にまとまると思っておりますのでよろしくお願いいたします。

私は砺波市で御承知の方もおられるかもしれませんが、住宅建築それから不動産をやっております鷹栖建工という会社の代表をやっております。現在、私自身が散居村にある敷地500坪ぐらいのアズマダチのある住宅に住んでおります。ですから、私もそれなり歳で約50年近く、このアズマダチの住宅に住んで現在に至っている状況です。そして、日頃、家造りという仕事を通して感じていることをお話できればということで、特に、余西さんからは、日頃ちょっと批判的なことを言っていることもありまして、参加することになりました。非常に偏った意見とか、この場に相応しくない話になるかもしれませんがどれもお許しをいただきたいと思います。

まず、私どもの会社ですが、現在50周年を迎えました。そういう住宅に関わる会社の歴史の中で、その歩みから考えても、大変お客様の家造りに対する考え方が、変わっていると日々実感しております。昭和30年代後半、高度成長期から経済成長に伴って、サラリーマンの収入が増え、どんどん土地を開発して家を造ったという状況があります。そして、この砺波市も昭和45年以降、田んぼを潰して団地を造り、新しい家を造っていくということで発展してまいりました。そういう中で、石丸地区や柳瀬地区といった大変大きな団地ができたことは、市民の皆さんも御承知だと思います。昭和40年代の当時の家造りは、御施主様がある程度お金を出されて、御主人のそういうプランを大事したものだだったと思います。やはりお金を出すからには、プランにもちゃんとした自分の意見を出す。そういった家造りが行われたと思っております。

それから、そのような中で女性の進出とかありましたけれど、どちらかというと奥様の意見が大変強くなりまして、旦那さんはお金を出すのだけれど、家造りは奥様の意見を主体とするということでリビングとかキッチン、いわゆる台所周りとかは奥様の意見を重視した家造りになってまいりました。また、最近は核家族化が進んでおまして、子どもの世帯が独立して家を持つとか、同居するにしてもお嫁さんの意見を主にして、家を造っていくということで、その家族の中のキーマンが時代とともに、お父さんから奥様、そして、お嫁さんになってきているのが現実の家造りの話であります。

そして、家造りは昔、三代にわたって、四代にわたって造ることがございましたけれど、

それぞれ経済的事情がありまして、若者世代の家造り、それから 40 代、50 代の世代の家造り、そして団塊の世代、高齢者の世代、それぞれの自分の世代にあった家造りをするようになってまいりました。なぜこんなふう到家造りが、世代にあった家造りになってきたのかということを考えて見ますと一言で言えば、皆様御承知と思いますが、経済的に豊かになった。それぞれの世代が自分のライフスタイル、生活スタイルになった。例えば、自分のファッションもそうですけれども、そういった家でも、自分のライフスタイルを表現するようになったと感じております。

御客様の目線から考えますと我々工務店とかハウスメーカーが、同じ家、間取りとか外観を同じようなものを提案すると、御客様のそれぞれのライフスタイルや大切にされている価値観、例えば古民家風タイプの家を好む人、それから和風タイプの家を好む人、洋風の家を好む人ということで、それぞれの御客様の価値観を取り込んだ家を造っていくという時代になってきたと思っています。私どもが家造りの御相談をしているときに、「どうしてこんな」というような場面に出ることがあります。従来、農家住宅は二間続きで仏間があったりするのですが、それが勿論、座敷自体がないということもそうですが、和室のない住宅が出来ております。どうしてなのかと私どもも思います。また、母屋が大きく大変に立派なお宅なのですが、どうして同一敷地内に棟別に若い人の家が建っているのかということを考えます。それから、1 人っ子同士の御夫婦なのですが、それぞれ当然実家があるのですが、新たに土地を求めて住宅を建てる方もおられます。ということで、それぞれの家がそれぞれの家族の事情があって、相談した結果、そういう色々なパターンで住宅を建てられる状況です。それで、皆様もそうでしょうけれども冠婚葬祭、従来大きなお宅では、結婚式やお祭り、それから御葬式も自宅で行う時代でありましたが、今はホテルやセレモニーでそういったことを行っています。

それから、親世代と子ども世代の食生活が変わったり、また余暇の過ごし方も変わったりしております。昔のように休みが少なく、休みの日には一緒に農作業をしたり、一緒に過ごしたりしていた時代から、会社勤めが中心となって、変な話ですが家族がバラバラになるという時代になってまいりました。そういうことで、御客様を取り巻く仕事や生活環境が、戦後、非常に変わっているということ。このことは私もそうですけれども、皆様も同じだと思っています。余談ですけれども、私の住んでいる鷹栖地区では、昔の商店街は今、大変寂れています。ですが私の住宅の 1 km 圏内にコンビニが 3 軒もあります。食料は勿論ですけれども、銀行の代わりにお金を引き出したり、またインターネットで手配した商品の代金決済をしたり、それからバスとかチケットの代金決済を私のような散村の住宅に住んでいる者でも 365 日 24 時間できるようになっているわけです。私は何を申し上げたいかということ、それほど散村に住む我々の周りでも生活環境が変わってきて、御客様の家造りに対する考え方が変わっていることを申し上げたいわけです。

もう 1 つは、住宅に関する建築資材、住宅設備は非常に改善されています。いわゆるエアコンや暖房機具、照明器具、色々ありますが、そういった物も非常に性能が良くなりました。また、外壁材、サイディングと言ったものですが、非常に耐久性の良いものになってきました。窓でも断熱サッシと言われまして気密・断熱が高いものが開発されております。私は全体として、風雪に強い省エネで快適な性能の高い家が、現在出来るようになってきているということを感じております。そういうことで、建設資材、設備機器も非常に良くなったということを申し上げておきます。

そして、もう 1 つ大きな問題というか状況の変化があります。それは、国の家に対する政策、考えが変わったということでもあります。阪神大震災の以降、耐震基準の見直しがありました。今日もこのパンフレットの中にあるのですが、「耐震診断をしませんか」ということで書いてございます。昭和 56 年 5 月以前のものについては、耐震上、非常に問題があるということになっております。そして、最近エコポイントと言われていますが、窓とか外壁の断熱性を高めることに対する補助金がついております。

それから、国のほうでは住宅のライフサイクルを平均 25 年ということなのですが、それを長寿命化する政策が行われています。長持ちする住宅を造るようにと、そのような政策の背景があります。色々お話をさせていただいたのですが、我々が住宅を造るときにいくつかの条件がありまして、現在の家造りが行われていることを古い住宅もあるのですが、新しい住宅で取り組まれていることを御理解いただきたいということです。

私の仕事を通じて、感じていることをお話させていただきましたが、耳障りなところもあったと思いますが、よろしくお願いいたします。

余西：どうもありがとうございました。

今ほどは、高度成長期の時代から、今、各々のライフスタイルが変わってきている。住宅に対する要望も変わってきている。ということでございまして、そんな中で、核家族化とともにコンパクトな家造りが進む一方で三世代が同居する。そういうために、古民家を再生するケースなど様々な住環境が創出されておるわけですけど、都会に限らず田舎の家庭であっても就労環境については、今、都会並みに変わってきておるわけございまして、このようなことから余暇時間が増大してきていること等もございまして、そうした中、観光などで人々が移動する機会や様々な交流が、今、現状として出てきているわけでございます。

そのような中から、砺波の存在感、あるいは方向性について、若い方の意見として、3年前まで東京のほうにおられた北村さんには丸ビルにお勤めで、都会からの若者たち呼んでおられるということを踏まえて、お話をいただければと思います。

北村：北村夏樹と申します。

2009年の秋に、この生まれ育った砺波に戻ってまいりました。今の紹介で丸ビルとありましたが、東京にいた頃は、森ビルという会社で六本木ヒルズの立ち上げから広報PRの仕事をやってまいりました。こちらに戻って来て、その経験とか人脈とかを生かして、何か地域貢献できることがないかと数は少ないのですが、企業さんの商品開発のお手伝いとか地域活性に関して少し活動をしています。

今、方向性というお話がありましたけれども、先程、篠山市の麻田さんから講演があつてチャレンジ2030でしたか、その目標が「2030年に人口を倍増させる」と非常に分かりやすいと思った。砺波の場合はどうなのかと思ったときに、先日いただいた砺波市総合計画のキャッチコピーを見ると、「庄川と散居に広がる健康フラワー都市を目指して」と書いてあるのです。これを見たとき、何をしたらいいのか正直分からなくて、多分ほとんどの人がそうだと思うのです。一つのをまを良くするとか、盛り上げるとかやるときは、みんなが同じ方向を向いて、やりたいことが色々あるかもしれませんが、目指す方向はやはり、一つに分かりやすいものがあつたほうがいいのではないかと思います。

先程、六本木ヒルズの立ち上げをやったとお話しましたが、森ビルという会社は、それまで結構バラバラだったが、六本木ヒルズの立ち上げ前3か月位は、本当に全社員がこのプロジェクトは成功させようと寝る時間も惜しんで、それが快感になったメンバーもいるのですが、それくらい一つの目標があれば非常に頑張れた。砺波市も非常に豊かでいい街だと私は思います。その豊かさを生かして、一つの分かりやすい目標を設定して、それに向かっていくということが、非常に大切だと思っています。

余西：どうもありがとうございます。

それでは、先程から麻田先生にもお話いただきましたが、横山さんのほうから地域住民が主体となって、収益性を高める取組に関して、先程の基調講演の中にあつた篠山市が先進的な事例であると思うわけです。その篠山市での活動をコーディネートされてきた横山さんから、昨今の経済事情を踏まえて、これからの地域活性化などの地方が取り組むべき課題や方向性について、御意見をいただきたいと思っています。

横山：横山です。

今日のタイトル、「散居村を生かした経済の活性化」ということですが、散居村はこちらの個性であります。文化的な景観であり誰が見ても思います。私も昨日から来させていただきました、昨日ちょっと曇り空で見たのと、今日、改めてこの晴れた日に立山連峰を背景にしながら、東側に立山連峰を望みますと西側のスギが緑濃く映ります。昨日と違った風景で非常に綺麗な景観だと思います。篠山のほうが群でありまして、集落は塊（かい）、塊村、一つの塊のように集まった

集落で、ぜんぜん違う思いをいたしました。それは個性だと思うのです。

先程、住宅のライフスタイルが多様化してきて古民家を愛する人とか、新しい住宅や白い家とか色々な好みが、世代によって変わってきたとのコメントをいただきました。篠山市は、今年に入ってから「24 時間営業の店舗はお断り」という条例をつくりました。これは市長が、篠山は 24 時間、開いている店は要らないというイメージであります。つまり、多様化するのを全て受けて入れてしまうと逆に個性は弱まります。地方中核都市で 4 万人位の篠山市で、メッセージを送らないといけない。企業立地するにしても、篠山はどういう街なのかというときに、何でも受け入れるよりも、むしろ自分たちの市の方向性として、「こういう店舗は要りませんよ」ということははっきり言ったほうがいいと私も思います。

今の市長は、農都宣言ということで、農の都、農業で日本一の都を作るということを宣言いたしました。その一方で大型店舗から、24 時間営業することの要望があったのですが、それは断るということでした。「1 か月で条例を作れ」ということで私の担当している景観室にきまして、大変でしたがそのようなことをした。逆に個性を生かそうと思ったら、はっきりと方向性を個性を示すことだろうと思います。

タイトルの経済の活性化となっているのですが、多分、散居村の保存意義は分かりますよね。誰が見ても素晴らしいと思うのです。でも、自分たちの暮らしは将来どうなるのか、基幹産業である農業はどうなるのか、この展望がなかなかしんどいですね。それで人口が減る、少子高齢化が高まる、18 歳になったら進学等で出て行く形の中で、将来の暮らしがどうなりますかというときに、地域の活性化として企業を誘致してくださいと市に要望するだけで解決するのかということだと思うのです。

篠山でやっていることは、先程、麻田さんのほうからコメントがありましたように、地域が主体にならんとあかんと違うかと考えています。広域合併しますと予算が限られた中で、市がやれることはしれているわけで、篠山市も企業誘致をやっています。でも、自分が事業主で社長になったと考えて篠山市に出店するかな、多分出店しないですね。全国で出店してくれとやっており、高岡も砺波もやっており、でも来ますか。それで 5 年、10 年経ったときに要望だけで 10 年明け暮れて何が活性化しますか。そうしたら、地域のことは自分たちでやらないとあかんやろと、誰が主体かというところと行政との役割分担の中で、目標としては同じ方向を行政と連携するけども、やはり地域が主体となって課題解決をする。課題解決する手段として、まち並みと景観を生かすということを手段としてやると非常に効果があるだろうと思います。

文化景観をつくるという目標をおくと、何か保全とかで活性化しないような印象がありますが、そうではない。今問題になっていること、農業をどうやって維持するかだとか、農地をどうやって保全していこうか、高齢化していくとスギの木立ちから落ちるが枯れ葉や落ち葉をどうやって、有効に管理して、それから除雪作業もみんなでどうやって取り組んでいこうか。そういう中に今の景観を守ることが、いかに役立つかということを分かりやすく示すということが、非常に重要で砺波市における文化景観は目標ではなく、これは手段で皆さんの暮らしが将来明るい方向で高齢化社会でも、息子が帰って来なくても、何とか今のコミュニティを維持して、暮らしのレベルを下げないような、人口減少しても下げないような取組を地域として作り出していく。その主体を皆さんがやっていく。これがこれからの地域の活性化の一番の方法ではないかと思っています。

篠山でも、行政ができることはしれています。先程の「電柱を地中化しなさい」という要望はいっぱいいただいています、「お金がないのでできません」と答えています。麻田さんのところからも要望がきています。伝建地区（伝統的建造物群保存地区）は、篠山市で先輩格の城下町の地区があります。電柱の地中化はやっておりません。10 年来の要望いただいておりますが、広域合併の施設の造り過ぎて赤字で、財政難で、とても余裕はないので、こげ茶色に電柱は塗っただけみたいな状況です。福住はこれからですので、未だ何もできていない。そういう中で何を言っても始まらないので、地域は地域で何ができますかということです。いわゆる、防災で言っている自助、公助、共助がありますが、自助はタンスが倒れないようにつつかい棒をすとか、公助は行政がやる。それで地域としてということです。そこがポイントだと思います。地域として何をやりますか。

余西：いいお話を聞かせていただいたと思うのですが、今日も私どもの副市長並びに議員の皆さんもお見えになっていらっしゃいますので、篠山市が取り組んでいる地域、地元を大事にする。地元の経済を大切にすることというのは、本当に重要なことだろうと思いますので、一步一步、2段跳び3段跳びではなく、先程からの麻田さんの話がありましたように、一步一步クリアしていくことが、一番大事なことでなかろうかと思ったわけでございます。

それでは、このあと森田さんにお話をいただければと思います。

森田：こんにちは、森田由紀子と申します。

私は、北海道で生まれて、東京で仕事をしていて、6、7年前に富山に移住という形でやってまいりました。砺波には親戚もいて、縁もゆかりもないわけではなく、夫のほうの親戚なのですが、そういうご縁があってやって来たのです。富山にやって来たときに、こちらの持つ自然景観の美しさとか、豊かな自然、それから歴史的なものが色々あるということに、非常に魅力を感じまして、是非この富山の魅力を色んな人に発信して、人と人が交流するような旅作りができないものかと思ってエコロの森という会社を創業しました。旅行会社であるのですが、こちらの人が何処かへお出掛けする旅行ではなくて、他所からこちらに来ていただくための旅行を考えているところでございます。

私が北海道生まれということで大自然の中で育ったような印象を持つ人がいるのですが、そうではなくて札幌で生まれ育っていますので、住んでいる所は普通の一般の新興住宅地見たいな所でした。東京に来て住んでいた所も新興住宅地、それで富山に来て住んだところも、実は富山市に住んでいるのですが、田舎暮らしをしたいと思って来た割には、富山の田んぼを潰してできた新興住宅地に住んでいて、変だなという気もするのです。そんな中、富山のあちこちへ出掛けて行きまして、本当に持っているものが素晴らしいと思うものがいっぱいあって、私自身は新興住宅地に住んでいるけれど、本当であったら古い家並みに住みたいなと思ったりするのです。これは、新興住宅地にずっと住んでいたものにとっては憧れであって、北海道みたいに歴史のない地域に住んでいますと、何代も続く家とか、ずっと昔から御先祖様がいて仏壇のでかいのがあって、何代も何代も続いてきているところは、本当にすごいと思うのです。それ自体が価値であると感じるわけです。語り継がれてきたものがあったり、ずっと仕舞われてきて続けていっている食器とか古いものがあったり、ずっと続けてきたものは風土そのものを語っています。だから、潰してしまったら絶対に取り戻すことはできない。

富山でも、砺波地方は散居村の風景があるけれども、海のほうへ行けば小さくくっ付いた漁村のまち並みがあると、高岡のほうへ行くと町屋のつくりがあると、その地域、地域に個性がある。また、新潟のほうへ行けば、新潟の家は全然違って、同じ雪国の家でも屋根の形が全然違う。地域らしさを非常に語っていて、それ自体が地域の個性を語っている。家というものは非常に大事なものだと思います。

私の仕事とは、観光と考えているのですが、観光というのは場所を見るとか、ものを見る。「散居村の風景はいいですよ」と言いますが、本当の価値は場所を見ることではなくて、そこに住んでいる人の暮らしとか、住んでいる人の生活とかのそのものが伝わっていくことです。こういう営みがあったということが知られていくと、そういう交流が出来るといいなと思うわけです。そんな中で、今を維持していることは大変かもしれないが、こういったまち並み、勿論、五箇山みたいな合掌造りに多くの人が来ますけれど、五箇山の価値もそうだけれど、そこにある暮らし、生きていますので、暮らしというのは非常に重要だと思っているわけです。

観光と言うのは、物だけではなく、景観だけではなく、暮らしと景観と両方考えて、人と人が行き来するようなことができたらいなと考えているところです。

余西：どうもありがとうございました。

今日出席のパネラーの皆様方に一通り自己紹介を兼ねて現状の報告、あるいはこういうふうにしたいというお話を聞かせていただいたわけでございます。前回のシンポジウムでは散居村の魅力発見について、意見交換がされたわけですが、散居村をどのようにして、経済の活性化に結び

付けていくかということが、実は今日のテーマでございます。

そこで、横山さんには、政策あるいは研究するシンクタンクに在席しておられるということでございますので、このような砺波の現状におけるまちづくりについて、どのようにしていけばいいのか御提案をいただければと思います。

横山：そんな難しいこと。昨日から来て、だいたい富山県は初めてでありまして、先程、ちょっと最初の出だしが悪かったのですが、自分の自己紹介のことばかりを考えており、振られたこととマッチせんなと思って戸惑ったのですけれど、そんなことでは解決にならないですね。

先程は、地域が主体となってということを考えました。散居村は、実は扇状地で砂質であったために水の管理が大変こまめにしなくてはいけない。敷地の周りがあると非常に水管理が容易であってということであったと書かれておりました。そのために、このような形態ができてきたということです。昨日ミュージアムのほうへ案内していただいたところ、散居村を紹介するパンフレットがたくさんあった。それから魅力を考えたときに、この印刷されたものから考えますと、全体の景観、遠目で見た景観は素晴らしいと思います。そのあとはいきなり個人の家です。でも、扇状地で毛細血管のように、一方向に扇を広げたように、水路が流れ出たこんな土地利用は全国的に珍しくて、水路のネットワークがあり、近くで実際見ると敷地と農地の段差がほとんどない。ということは、いかに水利系統が素晴らしくやられているかということなのです。全体の景観もいいけれども、一軒も、カイニョ、アズマダチも非常に個性がある。そして、循環型の暮らし方があったのかもしれない。それが数軒集まって、例えば水路の一つネットワーク網の中で、どういう働きをしているのかというパンフレットがない。地域でそういう土地利用として、農地に囲まれた土地利用を維持しようとしたときに、どういう暮らし方をするのかがシステムです。営農組合でやっていこうとしたとき、そのシステムをうまく管理して、共助でもって管理していくようなことを検討しなければならない。そういうことが情報として、あまり出ていないのではないかという気がいたしました。

ですから、全体像も大切、でも地域、一定のテリトリーの中で、一つの班であるとか自治会、あるいは自治振興会が管理する運営する中で、どういう意味が散居の中にあるのか。そこで、暮らし方、農業を通しての暮らし方、毎日、多分こまめに、台風が来てもこまめにすぐに親父さんが出て行って、子どもが働く姿を見るようなことが素晴らしい。雨の中でも、大変で農地のことが心配で、橋が落ちないかなど、多分そのようなことをやっていたと思うのです。これは教育の上からも大切であり、進学率なんかもトップクラスなのは、散居の親父さんなんかの姿を見て、よく育ったような環境もあるのではないかと思ったわけです。

景観計画もちょっと見させていただきましたが、散居村、市街地がありますけれど、散居村と市街地のバッファゾーンみたいなところはどのような世界を描いていくのかよく分からない。そのあたりも課題ではないか。攻めてくるのは市街化が、道路、沿道からであり、保全しようとするのは散居村。農振法で守ろうとしているのは農用地。まとまった農地を守りましょうというから、饅頭でいったら饅子の中心は守ろうと、でも市街化が饅子の中心から来るかといったら、いくら散居でもそんな無謀なことはしないですね。端のほうから徐々に侵害してきている。それでは端の部分でどういうふうな調和したまちづくりをするか、意外に見えてこないことを景観計画で感じました。

篠山から考えますと、先程言いましたように、空き家活用をこれからアズマダチなど300軒位空き家があるということを知りました。個人資産なのですね。地域で取り組もう、あるいは税金で入れようとしたときに、地域の活性化のために税金を入れる大義名分が、行政側にいるのです。個人でほったらかしにしていって、ちゃんと維持した家には助成がなくて、ほったらかしして空き家になっているその人のところに税金が、助成が入ることはおかしい話になるのです。そのために篠山で麻田さんが言ったように、10年間無償提供、オーナーは10年間無償で提供して、地域が活性化のために使うことで、個人資産が地域資産になっているのです。その辺を考えていかないと、いくら空き家活用、空き家バンクを設定してやっても、やっぱり地域で空き家活用をすることを考えるのです。なぜ個人の何々さんの家で、何々さんの家の使い方に対して、何で地域が考えなければならないのかということもありますが、空き家というものは地域で使われていない無

用の物となっているわけで、無用の物を活用することで、有用な物になるのです。

先程のイタリアンレストランで若い人がお盆と正月に、帰ってくるか帰ってこないかという息子が、イタリアンレストランができれば友だちを連れて帰って来る動きがでてくるわけです。雑誌に載ったら、その雑誌を持って帰ってくる。自治会活動で今までまちづくりで評価してきた人は、高齢者なのです。でも、空き家活用すると、おしゃれな店が出来ると、おしゃれのファンみたいな今まで評価しなかった人が、「麻田さんすごいね」と高校生が声を掛けるようになる。やっぱり、違う層から評価されているという可能性があるのです。自治会活動でなんぼ言うても、地域は動かへん。でも空き家活用でそういう可能性もでてくることを考えていただいて、個人の家かもしれないけれども、地域の方でどうやってあのように活用することが定住促進につながるのか。こういうことを考えていただければ、非常にいいのかと思います。まだイタリアンレストランは雇用面では1人だけしかありませんけれど、その前の日置地区でやった芦屋プリンは、1個600円もするプリン屋さんが古民家に移ってきたのですけれど、ここは6人雇用している。50世帯位のところで6人も雇用していただいたのです。高校卒業した若い女の子がそこに勤めています。都会に出て行かずに残った。見事な活性化です。これは誰がやったかという自治会がやったわけです。行政は制度を作っているだけ、助成の制度を作っているだけです。自治会がそういう話をまとめられている。そのように6人雇用しており、結婚したらもっと定住促進になるかもしれません。と考えたときに、企業誘致だけを言っていていいのかという話になると思います。

余西：どうもありがとうございました。

先程の話にありましたように、篠山市には600軒位の空き家があるということなのですか。それに比べて砺波市は300軒ちょっとあるとお聞きしているのですが、先日、お話をお聞きしたときに300軒の中にアズマダチが60軒、マエナガレの家も含めましてですが、そのような中であって、実際、外部から来た人がその家をお借りして、あるいは住んでみたいということになりますと、本当に住めるのは、数軒であるというようなことでございます。篠山においても諸問題もありますけれど、持ち主の問題、相続の問題、色々あってなかなか手がつけられないという状況にあるとお聞きしているわけです。

そのような中で、北村さんは東京におられて、砺波のほうに友だちといいますが、若い人たちを呼び込んで色んな仕掛けをなさっております。そのことで砺波はいいところだ。アズマダチは、都会の人からすれば見慣れない家だと思うのですが、そんなところに住んでみたいということもあります。今、一生懸命砺波のほうに呼び込んでいただいているわけですが、そのような人をどのような形で呼び込んでおられるのか、そして、彼らはどのように思っておられるのか、その辺をお聞かせいただければと思います。

北村：今、横山さんの話を受けて、話さなきゃいけないかと思っていたのですが、余西さんのほうから、東京から人を呼び込むところの話をとすることであったので、そういう話をさせていただきます。

今、任意団体なのですが、「とやま style (スタイル)」という、今度、NPO化に向けて動いていますけれど、そういう団体に所属してやっています。それは何かと言いますと、東京の感度の高い人に来てもらって、富山のファンになってもらおうと、そういうシンプルな企画なのです。我々が思っているのは、1万人の人に1回来てもらうよりも、1,000人の10回来てもらったほうが経済効果はあると考えて、何度も何度も来てもらおうとやっています。

だいたい2、3か月に1回位、東京から15名位、人を連れて来て色んな所へ行くのですけれど、東京からはどのような人が来ているのかと言いますと、丸ビルに「丸の内朝大学」という大学、社会人の人が仕事に行く前に学ぼうと、そういう場があるのです。そのプロデューサーの人で古田秘馬という非常に地域活性に有名な人がいるのですけれど、彼に感度の高い人を集めていただいて、我々のほうは地域プロデューサーということで、当然、地元富山に住んでいますから、我々がいないと行けない所に行く。例えば、散居村の例でいうと尾田さんに非常に協力いただいて、芳里家ってあるのですが、そちらにみんなで来て1日限りのレストランに仕立てて、通常は住ま

われている家なのですけれども、そちらを1日限りのレストランにする。そして美味しいものを食べてもらって、富山県の砺波市にこういう素晴らしい屋敷があるのだと、まずそういうところを知ってもらう。ファンになってもらうには、まず知ってもらわないとだめですから、そういう地道な活動をずっと続けています。ちょうど来週末も、東京から7、8名位来るのですけれども、彼らの中には今年で7回目、富山に来るという人もいますし、確実にファンになっていただいている。ファンになっていただいているということは、富山県の砺波市にも魅力があると思っています。

余西：わかりました。

先程の基調講演にあった篠山市での取組のように、地域が一体となって取り組むことで活力を生み出しているわけですが、そのことによって人が人を呼び、1万人、1,000人という話がありましたけれど、元気で活力あるまちづくりができるような気がするわけです。そのためには、市民と行政が一体となって、まちづくりに取り組むことが一番必要であろうかと思います。今、砺波に求められているそのことが、一番求められているように感じたところでもあります。

全ての市民がその活動に参加できれば、それに越したことはないのですが、まずは小さなグループから、そういうことを仕掛けてやっていくことが、一番大事でないかと思うわけでございます。

そこで、森田さんに御意見をいただきたいと思います。

森田：先程、横山さんから「地域のことは、地域住民がやっていく」というお話がありました。また、北村さんからは、「ファン作りが大事」というお話がありました。

私も思うのですが、観光は人と人の交流ということなのですけれども、観光というのは人が訪れることによって、こちらの地域の経済活動につながります。それは、訪れた人がここの地域のお店でお買い物をしたり、ここの特産品を買って行ったり、ここに泊まって時間を過ごす。時間を過ごせば過ごすほど、この地域にとっては経済的な効果があるという簡単なことなのですけれども、黙っていて人はやって来ないです。どんな地域に人は魅力を感じるかというと、住んでいる人が幸せに暮らしているところに、人は魅力を感じると思うのです。まず、砺波に住んでいる人が、砺波のことを好きで、自分たちの地域がこんな素晴らしいところがあるのだねとか、今の暮らしがすごくいいし、これをやっぱり人に伝えたい、自慢したいと思っているようなところに訪れた人は魅力を感じます。

こんなところ面白くないわとか、つまらないとか、何もないわと思っていて、「ようこんな所へ来たね」と言われても、来た人はつまらないものです。ですから、来た人が魅力を感じる、観光の仕事をするとは、それは仕事ではなく、日常の暮らしとか、自分たちの生活とかに愛着を持って、生きていくということがすごく大事なのではないかなと思うのです。そういう地域の魅力ある所は、来た人にとってもすごく楽しいし、そして、交流が生まれて、やっぱりこの人にまた会いたいとか、散居の暮らしをしている人が、大変、大変と暮らしているけれども、何かそこでお手伝いできたらいいなとか、そういうようなお話をすることによって、その地域とのふれあいが生まれてくる。これが観光じゃないかなと思っているのです。ですから、すごく大きな物を造んなきゃいけないとか、特産品を作んなきゃいけないとか、ということではなく、自分たちの地域をよく愛していることが何よりも観光資源だと思います。

散居村の話でいえば、散居の家は大きくて大変であるとよく聞きます。維持管理も大変でお金がかかると、そこをどうしたらいいかという住んでいる人たちが考えて、自分たちの今のライフスタイルに合ったお家を造るとか、それを維持管理していくために、システムを作るということを考えていかなければいけないことです。そのような取組が必要だと思います。今のそのままを維持していくことは大変だと思うので、先程の話にあったお店のリノベーションとか、今の暮らしに合った内装にするとか、そういったことが必要だと思うのですけれども、個人の家が管理できないのであれば、例えば企業とかが保有したり買ったり、空き家を買ってそこを何かのお店にするとか、私もすごくお金持ちで大きな財産を持っていたら、ぜひ散居の家を1戸素敵な広いところにして、そこに人が集まるような古民家カフェみたいなことをやればということをするの

です。残念ながら今お金がないのでできていないのですけれども、そう思うわけです。

そして、そこに人がいっぱい集まってくれたら、砺波らしいおいしい食べ物を出して、「こんな砺波のおいしい食べ物を食べてちょうだい」というようなことができたらいいなと思うのです。そこでお金がない私が、どうしたらいいのかということを考えなきゃいけないのですけれども、そういうところに知恵を絞って、もっと大きい会社の人にやってもらうとか、だから、企業誘致などのすごいでっかい工場を建てるだけではなく、ソフトウェアをやってくれる人を探すとか、ホテルとかやってくれる人が来たらいいとか、民宿やってくれる人がいいかと、できたらいいと思っています。みんなが考えていることだと思うのですけれども、今までの形と新しいソフトウェアができていくと篠山のイタリアンもそうなのですから、ちょっと行ってみるかという感じになるかと思っています。

まず、人が来てほしいかどうかということに住んでいる人が思うか、来てほしくないところには人が来ない。来てほしいと思ったら、何かすればいいし、そんな人が来てもらわなくていいわと思っているのだったら人は来ないと思うので、そんな気持ちの問題かと思っています。

余西：どうもありがとうございます。

私も砺波市民であり、そういうことから散居村というのは、やっぱり大事にしていきたいという思いは、皆さんの心の中にあるのです。それが、全部が全部、100%そうなのかとなると、まずあり得ないことでございまして、その辺から、散居村というものを誇りに思って、自信をもって、外部から来られた方にPRする。そういうものも備えていく必要があるのではないかと思います。そんな中で、石崎さんの場合は、建築という業態の中、あるいは土地、建物、色んな形で砺波市の開発について、色んな意見をお聞きになっておられるかと思いますが、いい事例ばかりではなく、散居村のこういうものが反対意見としてあるということをお聞かせいただければと思います。

石崎：先程、自己紹介の中で、散居住宅に住んで50年ということで、自ら住宅に住んでいますので、それを前提としてお話します。また、あえて反対意見を言う立場なもので、耳障りだと思うかもしれませんがお願いします。

私は、住みよさランキングで砺波市がナンバー1で、私も大きい家に工夫して住んでいますので、個人的に不便だと言う必要のない人間です。先程言った話を踏まえたと住宅として現在の御客様にとってどうかと言いますと、なかなか価値を見出せない不動産といえますか、経済的な価値を見出せないということ、これは否めない事実だと思います。

ただ、色んな価値観の方がおられますので、当然、歴史的なもの、伝統的なもの、そういったものが一般の生活のライフスタイルであって、不便さもある程度、受け入れられる人には、非常に価値の高い住宅だと思います。特に、アズマダチの再生の場合、大規模改修するというもの確かにあるのですが、その中でもワクノウチを利用して核にし、玄関周りやリビングに使うということもあります。そういった住宅事態の全体に対する価値を多少不便でも使われる方もおられると思いますし、また部分的に利用して商業施設とか、住宅に利用される方もおられます。

古い物は古い良さがあるわけですが、古いなりに現在の生活から見ると不便だとすることがあると思いますので、そのあたりは御客様と一緒に悩みながら、御客様の価値観に合わせた家造りをするように心掛けたいと思っています。

先程、たくさん時間を使いましたので、否定的な部分もあるのですが、やはり景観のいうものは大事なので、できるだけ残せるように努力したいと思っています。

もう1点、カイニョの中のメインであるスギの木が、突風で倒れたりする被害がでております。安全、安心な家であるべきところで突発的な不安材料になっているのは、本当に深刻な問題だと思っています。また、カイニョには住宅用の色んな役割があり、例えば防風林であったり、燃料であったりしますが、ある程度の歴史的意味、伝統的な意味もあります。現在の生活で支障のないガーデニング、外構ということを含め考えて、維持管理しやすいものにしていくことが大切だと思っています。

余西：もっときつい話がでるのかなと思ったのですが、色んな立場から、建築の立場から考えますと、そのようにおっしゃられるのはよく分かります。

そこで、砺波らしい散居村を踏まえて、砺波らしいまちづくりが必要であるということは、間違いないわけなのです。それを、具体的にどう取り組んでいけばよいか、その辺の御意見をいただければと思うのですが、北村さん何かありますか。

北村：難しい課題ですけれど、この散居村を守るとか、先程の横山さんからの話からも人口の問題とか、空き家が増えているとか、森田さんからもこの街が好きとか嫌いとか、石崎さんからも価値観の話とか、色々キーワードが出てきたと思うのですけれど、その散居村を守るということをやったときに、それだけを考えればいいかという僕は駄目だと思うのです。それでは、何をやるのか、やればいいのかという、散居村の空き家の対策するためには人に住んでもらわなければいけない。人口も減っているから、空き家が増える。それでは、人口を増やすにはどうすればいいか。そうすると政策として、人口を増やすためには何をしなければならぬか。政策、政治ということに関係してくると思いますし、色んなことがリンクしてくると思うのです。

篠山市の話を書きましたけれど、感動した街の話がありまして、島根県に隠岐の島という小さい島があるのを御存知だと思うのですけれど、その中に更に小さい島があるのです。海士（あま）町といって、海の武士と書いた海士町という街があるのです。ここは人口たった2,200人しかいないのです。当然、箱物なのか何か分からないのですが、財政が悪化して破綻寸前までいって、街の人は全員が危機感を持っていて、これは何とかしなければいけないというので、首長とかが自ら給与をカットして財政問題に取り組んでいった。それだけでは当然駄目なのです。それではどうしたかという、人口を増やそう。そして、何をしたかという、Uターン、Iターンの人を増やそうという明確な目標設定をしてやっていったのです。そうすると平成23年で、元々2,200人程の人口だったのですが、Iターン、Uターンの人が平成23年で185人位来たのです。約1割位の人がIターン、Uターンの人で、これはすごいことだと思ったのです。どのようにやったかという、今、問題になっている空き家の活用として、当然、無償でそういう人に住んでもらう。だけど仕事がないと困りますので、その仕事はどうしたかという、たまたま海士町には海がある街だったので、漁師の見習いをして、それで生計を立てるといって、ほとんど収入はないのですけれど、そうやって見習いをしてやっていく。産業として昔からナマコがあったらしくて、そのナマコを冷凍、加工する工場を町（国からの補助等）が9割位の補助金を出し、加工センターみたいなものを造って、法人化してIターン、Uターンの人に代表をやってもらうなど、そういう雇用創出を行った。さらに、子育て政策で子どもが生まれたら1人目10万円だったか、2人目30万円、3人目50万円という大胆なことをやっていったことが功を奏して、増えていったと思うのです。実際、好きか嫌いかという話がありましたけれど、それには教育ということが非常に大切だと思うのです。海士町は何をやっているかという、中学校の修学旅行で東京に行くのです。それはよくある話ですけれど、ただ単に東京に行っても、得られるものがあるかもしれないが小さいのです。何をしているかという、一橋大学、有名な国公立大学ですけれども、一橋大学に行って大学生に海士町の素晴らしさを講義するのです。講義するということは、自分たちの街のことをよく知らない、好きじゃないといけなくていけないと思うのです。その修学旅行が、ただ単に何処かへ行ってきました、何処かで学んできました、というよりも、すごく意味のあることだと思うのです。そういう教育とか、政策とか、雇用、人口減、その人口減に対してどう対応していくのか、私が最初に話をした明確な方向性、目標というものを市民の人、みんなが分かりやすい目標を設定して、それに向かって、どう進んで行くか、チューリップフェアだっていっぱい人が来るじゃないですか。そういうところでも市民の目標を啓蒙したらいいと思いますし、折角来てもらうのだったら、砺波のことを知ってもらい、もっともっと、いいやり方もきっとあると思うのです。この散居村と経済というテーマがありますが、それだけではなく、政策とか、教育とか色んなことを含めて、分かりやすい目標を挙げて、市民全体で取り組んでいかなければいけないのではないかと思います。

余西：全市民が目標を設定して、それに共有する目標を持って進むということなのでしょうけれども、

そこで、森田さんは北海道にお生まれになって、富山県という地が良いということでお住みになっておられるのです。例えばこの砺波地方にお越しいただく、皆様方に対して旅行の関係もおやりになっておられるのです。そういうところから、お越しになった方に対するどのようなもてなし、形、あるいは、ここに何度か来ていただいて砺波市に定住していただけるように持つていくには、何かヒントがございましたらお話いただければと思います。

森田：すごい難しい話がきましたけれど。まず、来る人に対してのおもてなしというのは、何よりも住んでいる人が自分たちの生活を愛していることと、誇りを持っていること。誇りを持つということは、北村さんが言ったように、子どものころから自分の住んでいる所に対して、愛着を持つということが非常に重要だと思っていますので、その気持ち自体が最低限のおもてなしです。

地域には地域の特性がありますので、訪れる人はその地域らしさを求めて来る。その地域の人のとの触れ合いを求めていることですので、例えば散居のお家であれば、散居のお家らしさというものを拝見していただくことが一番てっとり早いのです。今の課題は、散居の家自体がどんどん無くなっていくということです、無くなっていくということに対する危機感は、持っていたきたいと思います。

最初、砺波に来たとき、景観が良かったのだけど、一部田んぼを潰して普通の住宅が並んでしまった。それだけ広い土地なのだけれど、それは寂しいものを感じました。失われたものは取り戻せないのです。けれども、失っても新しく出来るものもあります。出来るというのは新しいライフスタイルに沿ったソフトウェアであったり、アイデアだったりしますので、そのアイデアを動かしていくのは、人の知恵だし、勿論、政策的なものも行政支援も大事だけれど、やはり、仕事をしている私たち一人一人、民間企業であったり、生活者だったり一人一人だと思うのです。どんなことをすれば、人が喜ぶかじゃないかでないのです。喜ぶかだけではだめなのです。どんな仕事をすれば人が来るか、どんなものを提供すれば、街にお客さんが来るかということを考えるのは民間の人そのもののことなので、そのこと自体がおもてなしにつながる。その課題は難しいのですけれど、サポートするのは行政、することはその支援で、働く人の一人一人がやっていく活動ということが意義あることだと思っています。なので、おもてなしというのは、難しいけれど簡単なことで、日常の営みをきちんとやっていくことではないのかと思っています。何か抽象的で申し訳ないです。

まち並みが維持されているということは、八尾とかに私はよく行くのですけれど、家の周りに花とかを飾ってあって、すごく奇麗にしてあるのです。そこは、補助金があるからどうこうというのではなく、自然発生的にそのようになっていっている部分があるのです。自分の住んでいる家の前が、すごく奇麗に飾られているとか、そうすると来た人は自分たちの家を大事にしているのだと思う。修景予算や修景事業をやっているところによくあるのですけれども、修景事業があろうがなかろうが、自分の御予算で自分の家を作っている。そこで、お店を開いてみる。と八尾もまだ全然駄目なところがいっぱいあるのですけれども、駄目なところというのは、お客さんが来る頃にはお店が開いていないとか、そのようなことなのですけれども、でも暮らしている人のちょっとした心遣いということが、街を作っていくと思う。作っていく街が、こうしなさい、ああしなさいと出来てきたものではなく、昔のまち並みがどうして残っているのかというと、大事にしてきた気持ちがあるから残っているので、それが「もういいや」と思ってしまったら、そこで終わりだと思うのです。終わりにならないようにしていくことが、いいのではないのでしょうか。そこに終わらない気持ちを持ち続けることだと思うのです。すごく今日は抽象的なことしか言っていないで申し訳ないのですけれども、観光といっても入場料払って来るチューリップフェアは素晴らしいけれど、それだけではないです。そこの一歩先のものは、生活そのものなのです。観光というのは、生活そのものなのかなと思っています。

余西：どうもありがとうございます。

私どもがこの砺波市に住んでおりまして、チューリップフェアに30万人近くの皆さんが、外部からお越しになるのでございます。そこには、市民一人一人がもてなしの心を持って、あるいは自分がここへ来たときにどうしてほしいのか。例えば観光地へ行った、ほかの所へ行ったときに、

自分がどうしてほしいのか、そのことが一番大事ではないかなと、そのことをいかに市民一人一人がもてなしの心を持ちつつ、自分に問いかけながら、生活していく人々を多く作っていくことが一番大事なことでないかなと思うのです。

そこで、散居村での建築を通じて先程からお話しておりますけれど、形容を小さくお話をされたのですが、色々土地利用問題、色々あろうかと思うのですが、その建築の面からも一つ話をいただければと思います。

石崎：先程から時間が延長しておりまして、大変申し訳なく思っているのですが、今、建築の話と言われましたが、最後は散居村を生かした経済の活性化というテーマについて、お話をしたいと思います。

北村さんもいいことをおっしゃったと、私も同意見なのですが、Iターン、Uターンの話が出ておりましたので、そのような話をしたいと思っています。

私は散居村という全体ではなく、そこに点在するカイニョに囲まれたアズマダチの住宅の視点で考えていくということが大事だと、全体を構成している1軒1軒の住宅がどうなっていくのか、この問題が散居村を生かすという言葉の前に一番大事なんじゃないかと思っています。空き家利活用の話は私なりに意見ありますが、空き家利活用は別として現実的には空き家になるということも含めて、核家族化が進んでいる。経済が豊かになって、地方を離れて、故郷を離れて行く人もいますし、また、そういう意味では核家族化が進んでいる。親世代から子世代への土地建物の継承が絶たれてしまったというのが、全国各地で見えている大きな問題だと思います。

当地の住宅自体、アズマダチ自体が核家族化していて、親世代から子世代へのバトンタッチが現在されていません。冬の除雪の大変さ、それから買い物、通勤通学の不便さ、若い人にとっては、マイナス面のほうが結構気になるということが実情です。散居村の話をすると、どうしても、観光とか、商業施設、また介護施設に利用するという話が注目されますけれども、実は散居住宅の核家族化、同居化が進まないということが大変大きな問題であり、こういったことから同居化を進めることが、あえて経済効果といえますか、小さいですが効果になったり、砺波市が定住人口の減少を食い止めるという話であったり、そのようなこととか、地域のコミュニティを守ることで、散居住宅の中で実は、三世代、四世代の同居で住んでいる方も実際におられます。そのような大家族で住んでおられる方々は、逆に言ったら、小さいかもしれないけれど生活を通して経済的な非常に効果がある、かつ、地域のコミュニティというか活動を守っていく、継承していくということで、大変大きな働きをしていると私は思います。皆さんもそうだと思いますが、散村住宅で同居をするとお爺ちゃん、お婆ちゃんが、孫の面倒をみると、要するに親世代も孫の面倒をみるということで、子育て支援になります。また、子ども世代が親世代、お爺ちゃん、お婆ちゃんの少しでも面倒をみるということが、福祉活動の一環になるわけです。

それで我々は、交流人口の話をしたり、商業とか、観光施設の話をしたりしますが、実は我々の暮らしている散居住宅自体を継承していくということをもっともって考える、継承しやすくすることを考えていく必要があるかと思っています。東日本大震災のときに、皆さんもそうですが、絆を大切にするという話がありましたけれども、実は昔の散村住宅は、農作業を通して家族の絆とか、地域の絆を大切にしていたという、支え合って生活をした住宅だと思います。そのような砺波の支え合う住宅で、形としてカイニョのあるアズマダチの住宅だったというルーツはありますが、こういう時代の流れの中、ライフスタイルが変わりますので、ぜひ若者にも住みやすい、ある意味で快適な部分のある住宅とか、メンテナンスのできるスギの木を伐採して、ちょっと景観が変わりますが、そういったような緑豊かな庭のある住宅というものを市というか、行政と市民が一生懸命に作っていくように心がけるということが大事かと思っています。

経済の活性化という非常に大きなテーマなので、悩ましいのですが、ぜひ同居と言いますか一緒に暮らすという「暮らしを再生する」ということで、それがひいては、散居村の存続ということになると思っています。

余西：どうもありがとうございました。

最後になりますが、横山さんにまとめと言いますか、話をさせていただければと思います。

横山：先程、石崎さんのほうがおっしゃっていましたが、暮らしを再生する最後の言葉が、暮らしを再生するというのが誇りを持つことになります。だから、誇りを持って子どもたちに伝えると言ったら、まさに暮らしでありまして、暮らしを伝えていくことだろうと思います。空き家活用のほうから言いますと、活性化というのは流通性を高めるということでありまして、農地もそうなのですが、流通していない不動産というのは、じっとしているわけですから、ようするに競争力を高めて、市場性を持ったものに変えていくということだと思ふのです。それを地域の共助として取り組むようなシステムをぜひこしらえてもらったらということが、私が言いたかったこととなります。それで篠山市も、今、そのことに取り組んでおります。

先程、麻田さんの講演の中、質問で「ノオト」とよく見つけられましたねと思ったのですが、ノオトの質問がでておりましたが、実は、ノオトは公共施設などを管理する指定者管理としての第3セクターでなく、市が全額出資した組織であります。ところが、市が経営してもなかなか黒字経営にならないようなものを極端に言えば押し付けている面もあるわけで、そうしたら企業体としてノオトが育っていくには、そういう迷惑施設と言ったらおかしいのですけれど、儲からない施設ばかり指定者管理でやっていると、なかなかうまくいかないわけです。独自の事業を、国の色んな募集している事業に応募して、予算を取ってきて展開してきた。その一つに空き家活用があったということでもあります。ただ映像に収めたものは、観光のほうの映像化みたいな事業を取ってきて、本当はお祭りなんかをアピールするのだけれど、空き家活用のプロジェクトも映像に撮ったというものであります。そういう取組があったわけなのです。

話が途切れますが、こちらに來させていただいて、福住なんかもそうですし、篠山市で今、取組もうとしている24時間の店舗を廃止しましたが、個性があれば評価する人が絶対にいるのです。だからマルチで360度、全ての人を受け入れるのは個性がないのです。コンビニなんかは、よく売れる筋の物を仕入れます。ですから日常使うには便利です。でもこだわって、何とかかんとかというペンや筆の何とかの毛質でできたといったものは絶対に売っていない。でも個性ある店というものは、そういうものを揃えて売っていると10km位離れていても買いに來るのです。ということは、個性があれば絶対に評価する。評価する人がいる散居村には、今日、壇上に上がっている森田さんは住みたいと言っている。お金がないから無理だという話しですけど、要するに評価しているのです。ぜひ住みたいという人がいるということは、その人をいかに砺波に連れてくるかということです。

そのきっかけを地域でも市でも探っていただくと砺波を愛している人がやって來ます。今、福住に誘致して來ていることは、空き家の利用者ですけども、麻田さんが紹介しながら、一緒に話をしながら、物件を紹介してこういうものがあると言いながらも気にいらなかったら、「この物件は、もう売り手がついた」という話に変えるわけです。要するに、そこで面接しているわけで、全てを受け入れるわけではないということです。それくらいの地域が取り組むのは、流通規模で良いわけです。目標は人口倍増みたいなものもありますけれど、何ができるか一步一步でありますから、少人数でもいいから、砺波を評価している何人かに住んでもらえば、その人がもたらしてくれる情報とか、交流が、地域の活性化を呼びます。30歳代の子育てしなければならない世代が、もし近所に引っ越してきて、その人と会話したり、挨拶したりする取組が、コミュニティが新しく展開する方向にあるわけなのです。地域づくりで取組もうとしていることは、そういう社会じゃないですか。

篠山は空き家活用で、今日紹介の中で集落丸山、これぜひ検索してほしいのです。そこは農家民泊に空き家を使って活用しています。集落でNPOを作りまして、NPOが経営しています。持ち主から10年借りるというシステムです。持ち主が正月とかに帰ってきたときは、農家民泊ですから先行予約で泊まれるように無料でしている。固定資産税分は地域から払ってあげて、それを10年間無償提供していただいて農家民泊として活用している例があります。

その事業は実は、先程のノオトが肩代わりしました。つまり篠山市では、今スタンダードなのは1/3、1/3を、県が1/3、市が1/3助成します。残りの1/3を事業主が負担する。ところが若い人がぜひ営業したいというときに、その事業費の一時金の1/3が払えない場合があります。その場合はノオトが全額出してあげて、月々の家賃として1/3を払う。これだと森田さんは可能性

があるかもしれないです。だって家賃はどこを借りていても払うのですから、それを10年間の借金をノオトが肩代わりしておいて、月々払わせる。篠山市の場合、実際に芦屋プリンさんが6人雇用してくれましたが、将来の夢として篠山で店を持ちたいと思った方です。デートの一環で、新婚旅行の前で、結婚式が決まっていたときに見に来ていた人です。篠山市の1/3の話を聞いて、家賃でいけるみたいな話になって、その気になって夢が実現した。そのような人は、ものすごく散居の集落とかで営業したりすることに夢を持っていましたから、プランがいっぱいあるのです。自治会は、わりと固定した概念しかなかったのですが、夢はなかなか描けなかったのです。しかし、移って来た新しいその人たちが、「食材をこのようにしたら受けるよ」とか、「阪神間でこのように販売したら来るよ」とかがヒントになって、どんどん活性化が進んでいく。移って来た2、3名の人たちのビジョンが地域のビジョンとなって、動かしているような状況が生まれてくる。そのようなことを考えると、空き家を1軒活用することで、地域を大きく活性化する方向にいかないでしょうか。そういう取組を私は、ぜひやってほしい。それが地域の問題解決になるようなシステムとなります。散居は全国的にも3か所位しかない。今の住宅の造り方として、私も建築を学びましたけれど、まちづくりや建築の造りは、散居で作るような作り方を教えていません。群として経済効率で造る宅地開発しか習わないわけです。よって、その答えを求められても、それは出ません。でもそれに挑戦しなければならず、何百年も戦後時代から続くようことは、ここにいる人でないと出来ないのです。それは頑張ってもらいたいです。そうすると全国から来るし、世界遺産になるかもしれません。それだけ評価されるようになっていくので、どうするかということで知恵を出し合う。そうすると、それは個人でなくて集落営農みたいな営みと関連付けながら、この景観にあるスギのカイニョなんかを守るような仕組みを共助として取り組むようなスタイルを自分たちのアイデアで出し、そこにボランティアとか評価する人たちが一緒になって参加して、何とかこれを文化遺産になるようにやっていく、こういうシステムだと思います。ぜひ頑張ってもらいたいです。

余西：どうもありがとうございます。

横山さんのお話を聞いておりますと、砺波市は砺波市らしい散居村を取り込んだ生き方があるのではないかなというようにお話でございます。そのような中で、独自性のあるといいますか、散居村を取り込んだ独自性のあるまちづくりに取り組んでいく必要があるということが最終的な結論でなかろうかと思います。

目前には北陸新幹線が金沢までの開業を迎えているわけでございます。高速交通体系の充実により、ここ砺波市は交通の要衝として、ほか地域とは異なるまちづくりを進めて、独創的な豊かな市民生活を作りあげられるような街にしていく必要があると思うわけでございます。

そのことを踏まえて、これからもまちづくり、散居村を踏まえてまちづくりに取り組んでいきたいというように思っております。

時間のほうも大分過ぎておりますので、パネリストの皆さんの中から、これだけは言っておきたいというようなことがございましたら、ないでしょうか。

ないようでしたら、会場内からの発言をお聞きしたいと思います。挙手のうえ、お名前をおっしゃっていただいて御発言をいただきたいと思います。

聴講：先程の森田さんのおっしゃった言葉が、非常に心に残っておりまして、住んでいる人が愛着を持っているかどうか、私はものすごく感じました。私も散居に住んでおります。非常にいいところだなと思っているし、山があり川があり、そして水があって緑もある。そういった四季を感じながら、日々楽しく生活しているのです。けど周りを見ますと、約4割近くの方が跡継ぎいるにも関わらず、そのうちその家が無くなってしまうという現実があるわけなのです。

そこが非常にこれから砺波市を考えていくときに、重要な点になってくるキーワードになると私は思っているのです。それはなぜかという、私の意見を述べさせてもらおうと、私は今住んでいるところがいいと思う価値観、けど子どもたちは果たしてどうなのか。もしかしたら、子どもたちと私たちの間に温度差が出てきている。この辺の子どもたちは、優秀な子どもたちが多くて、都会の優秀な大学へ行ったり、優秀な企業へ行ったりして帰って来ないのです。こうした

ことから、そのような家がどんどん多くなっている。それも要因、ものすごい大きな要因だと思うのです。

そういったことを考えたときに、私たちはこれからどうして行けば良いか、その温度差を埋められるのかどうか。先程、北村さんもちらっとおっしゃいましたけれど、教育というものが非常に大きなウエイトを占めていくのだらうと思うのです。そういった意味で砺波市も含めて、私たちも子どもと接する中で、そういうシステム体系ができたかと強く感じました。

どうもありがとうございました。

余西：どうもありがとうございます。

教育の高さが、この散居村の今、廃墟化を作っている一因にもなっているのかもしれない。

それではもう御一方。

《3名の挙手が有り。》

それじゃもう3人で打ち切りたいと思います。

聴講：市の方に聞きたいのですけれど、このシンポジウムの目的は何なのか。最終目的は何なのか。前回も聞きましたけれど、私はこのキャッチコピーでふるさとの眺望景観、散居村の保全ということであってありますけれど、経済の活性化ですとか、地域の全体の話になっているようです。けれども、今、一番問題なのは散居村の中でおきている農業形態の変容と土地利用の変化、それから農村の荒廃、解体です。それをどう食い止めるか。そのためには、行政と一般市民とどのようなコラボができて、その対価として地域が活性する。そういうものが目的だと思うのです。そのためには、今、農村で何が状況なのか。何が病なのか。原因なのか。そのために何をしなくちゃいけないのか。そのためにパネラー、それからタレントさんと呼んで来る。それで私たちが勉強する。そういうシステムをこのシンポジウムを使って養われるのかと思っています。

そういうことで一般市民として、ロジスティックな立場として何ができるのか。行政がミスリードになっちゃいますと、散居村のフェードアウトにつながると思うのです。そういう本質的な認識をもっと見つめていただきたいと思います。

余西：どうもありがとうございます。

このシンポジウムは、一番初めにも申しておりますが、散居村といわれる眺望景観をぜひとも後世に残していきたいというのが最終課題でございまして、それを広く市民の人たちに知っていただくということが、この会の趣旨であろうと認識しているわけであります。

そのために、先程、意見にあったように、一つに散居が廃れていく要因をお聞きしたわけですが、そのこと等を踏まえて次回、3回目があるわけでございますけれど、そのときにも話されるのではないかと考えております。

それでは御二人の方がいらっしゃったかと思います。

聴講：パネリストの皆さんありがとうございました。

石崎さんが触れられた散居村で、アズマダチで数世代が住むことの価値をお話されましたけれど、非常にその事柄は大きなことだと思います。子どもをきちんと育てる結果として、先程意見として触れられたように、多くの若い方たちが流出するということがあります。しかし、年配の方々をそこで面倒を見るということは失礼なのかもしれませんけれども、そういうこともアズマダチの中で行われている。散居で行われている。そして、それはこの砺波野の多くの人たちが持っている質実剛健っていうような砺波人の気質を作っているのではないかと思います。

そうしたときに、核家族化ということに石崎さんは触れられましてけれども、それは今度、統合して三世代、あるいは数世代の人々が住まう、そういった場を作り上げるために、何かいい方法があるというふうに思っておられるのではないと思いました。その点ではどうでしょうか。

石崎：私自身が何かいい提案があるわけではないのですが、家族それぞれの必要性をだんだん感じるようになっていくのは、私も感じています。前段は、核家族化して家が別、アパート住まいとい

う話もありましたが、最近は棟別ということで、同一敷地内で一緒に住もうということが出てきております。若い人も色んな経済情勢、子育ての問題を含めて、親御さんと住みたくなっているというのが、全体的な社会の動きだと思います。できれば、アズマダチの大規模改装で住んでいただきたいのですが、いずれにしても親世代、子世代が仲良く住むということが一番大事なことで、あえてその微妙なところは家族で相談して、やっていただきたいと思います。

それで私がお話ししたいのは、そういったような若い人たちが住みたいという時代の流れがあるので、行政とか周りの人が後押しして、ぜひ一緒に住んでいただきたいということを申し上げたかったわけです。住宅建築につきましては、お客様の要望があれば色々なやり方がありますので、十分対応できると思います。予算の問題とかがありますので、むしろ家族のつながりというものを今の時代の中で、先程も話がありましたように教育とか、色々な形で見直すということが、大切なんじゃないかなと思っています。

しっかりとした回答ができませんが、そういうふうにやっていきたいということでもあります。

聴講：ありがとうございました。

確か3か月か4か月ほど前に、法政大学の日本人の幸福度調査で、富山県が2番目で、1番目は福井県でした。どちらも三世代住宅が多い地域だということでした。そして、その2つの県は、確か毎年ある子どもたちのテストでも、非常に優秀な結果を出しています。そういった事柄を考えれば、この砺波野において、アズマダチで数世代が住むというライフスタイルというものが、今後とも維持していく必要があるのではないかと思います。ありがとうございました。

余西：どうもありがとうございました。

それでは、もう御一方に限定させていただきたいと思います。

聴講：今まで何回も、このようなシンポジウムに出させていただいているのですが、本当に今日のシンポジウムは、すごく考えさせられるいいシンポジウムだったと思うのです。いつもここにきていらっしゃる方は、だいたい地区の役員の方とかなのですが、できればこの素晴らしい内容のことを多くの方、住民の方に伝わるようなことを少し工夫していただければと、これは要望なのですけれど、今日、フェイスブックに載せたら若い人2人程来ているのです。なので、若い人が来るようなことも少し考えていただければと、これはあくまで要望です。今日は本当にありがとうございました。

余西：どうもありがとうございました。

これで御意見をお聞きになりたい方をおありになるかと思いますが、時間の関係もございますのでここで切りたいと思います。

それで、次回に向けて散居村の活用により、地域の発展につなげるということ考えますと、人々は、昔から自らの価値観や個性により、それぞれが考えるより良いものを選択してきた。しかし、今では、風情や情緒又は高気密や高断熱など、様々な住宅ニーズに応じた多様な選択肢がある。このことは、それぞれの価値観から導き出されたものであります。また、近年では、経済的かつ効率的な社会が形成されてきているように見えますが、心を重視する人たちも確実に増えているということでございます。このことが大事であろうかと思えます。

このような時代にあって、住民の大半が価値のあるものと考えられる散居村が、経済的な豊かさで裏打ちすることができれば、人々が幸せに暮らすことができる、地域を作ることができると思われま。

特に、散居村を生かした経済の活性化は、様々な価値観を持つ人たちが、最も理解しやすい経済的な論理を意識して、篠山市における取組を参考することなど、風景を生かして砺波ならではのまちづくりを進めていく必要があろうかと思えます。そのためには、その機会づくりやサポート体制を強固なものにすることによって、市民が競い合っ散居村を活用する機運が高まっていく。との集約をして、本日のパネルディスカッションのまとめとさせていただきたいと思えます。

それで次回のシンポジウムは、これまでは散居村に関して保全一辺倒の議論がなされてきたわ

けでございますけれども、この第3回のシンポジウムにおきましては、生活者、市民重視を念頭に散居村を活用することによって、更に市民が人生観や社会観、幸せ感、協調性などを高められないか、第3回目のシンポジウムで議論をしてまいりたいと思っております。

以上でございますが、本日は大変、不慣れな進行で御迷惑をお掛けしておったかと思いますが、私の役目を終えさせていただきますして、司会者のほうにマイクを渡ししたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

島田：パネリストの皆様、どうも、ありがとうございました。

本日のパネルディスカッションでは、様々なお立場から、散居村を生かした活性化について意見交換を進めていただきました。観光は生活そのもの、同居を推進する、またIターン・Uターンのすすめ、共助による地域力の活用など、具体的な御提言もあったところでありますが、市民の総意として目標を掲げ、前進することが最も必要であると感じた次第でございます。

このたびのパネルディスカッションでの討議を踏まえ、最終回となる次回のシンポジウムで、この地域が発展するための散居村の保全と活用について、更に議論を深めてまいりたいと思います。そのシンポジウムは、明年1月27日に「散居村の活用と地域の発展」をテーマに開催することとしております。多くの皆様にご来場いただきますようよろしくお願いいたします。

それでは、パネリストの皆様、今一度、盛大な拍手をお願いいたします。

《拍手》

どうもありがとうございました。以上で、パネルディスカッションを終了いたします。パネリストの皆さん自席のほうにお戻りください。

《パネリスト等の降壇》

本日のシンポジウムの結びに当たり、本実行委員会の杉森貢委員が閉会の挨拶を申し上げます。

◆閉会挨拶◆

杉森：皆様、御苦労様でございました。

午後半日、皆様方、今日は大変、秋晴れの良い日でございましたので、いわゆる屋敷林の雪吊り、そして雪囲いとおそらくなさりたい方も多かったのではないかと思います。本当にたくさんの方々にお集まりいただいて、今日のシンポジウムを開催できましたことを本当にありがたく思います。

散居村の保全、それは目的ではない、そしてゴールでもない、そういうふうにお話がありました。やはり私たちが、このシンポジウムの中で追い求めていきたいことは、この砺波市民が今後の発展の中で幸せに暮らして、そして市勢が発展し、いきいきとした砺波市を作っていく、そういうことに結び付けていきたいと思っております。やはり、この散居村を考えることが、そういうところにつながる。それがこういう会を催す意味ではないか、そんなふうにも思うところでございます。

この砺波らしさ、いったいどこにあるのか。先程のお話の中にも砺波を愛する、地域を愛せないと人に来ないであろう、本当にそうだと思います。私たちが、この砺波市をいきいきとし、発展した市勢豊かな地域に作り上げていくためには、私たち自身が胸を張って、「砺波市ちゃ、いいとこだ」というように、色んな方々に言えるってことがとっても大事なことであらうと、そんなことを今日思わせていただきました。砺波市、私たちが胸を張っていいところだと言えるためには、砺波らしさ、砺波市の個性、そういうものがなくてはならんのあらうと、そんなふうにあります。そのように考えたときに、この砺波市にあります散居の姿、これは先程のお話しありましたように、全国の中でも本当に数少ない景観でございます。私たちが全国の皆さんに誇れる、誇るべきそうゆう姿でございます。そういうことからすれば、砺波市ある意味アイデンティティ、そういうようなところにつながるものでなかろうかとも思います。こういう目的ではございませんけれども、1つの砺波市勢を発展させていくためにも、1つの手段として今後とも、私たち大切に守っていききたいものだと思います。

本当に本日、講演をいただいた麻田様、そして4人のパネラーの皆様、本当にありがとうございました。先程の要望にありましたように、散居村のことについて私たちが一緒になって考える

いい機会が作れたと思います。本当にいい話をお伺いできたと感謝をしているところでございます。特に、はるばる兵庫県からお越しいただいた御二人については、本当に貴重な御体験をもとにお話をいただけたことを私どもにたいへん参考になったと思っておりますし、今後の砺波市のこの散居村を考えていく1つのよりどころとして、今後とも参考にさせていただきたいと思えます。本当にありがとうございました。

以上を持ちまして、この第2回目のシンポジウムを終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

島田：会場の皆様には、長時間にわたり御聴講いただき、誠にありがとうございました。

お帰りの際には、アンケート用紙の提出をよろしくお願いいたします。

これを持ちまして、散居村の保全と活用シンポジウムを閉じさせていただきます。

どうも、ありがとうございました。

以 上